

万象 平成十四年十一月十三日第三種郵便物認可
令和二年七月一日発行（毎月一回一日発行）
第十九卷 第四号（通卷二〇号）

万象

B A N S Y O

七月号

2020. 7



七月の句

滝落ちて群青世界とゞろけり

水原秋桜子

「那智山に登る」と前書き。昭和二十九年作。

魂を揺らすほど轟々と落ちる勇壮な那智の滝、その滝を囲む蒼黒い杉木立の広がりをも、「群青世界」という造語によつて簡潔に力強く言いとめている。

滝の音までが群青に染まっているかのように感じられる。作者と一体化した立体的な一句の世界に、その風情に、後光の様な物を胸に受け、思わず拝す思いが湧いてくる。

(小林珠江)

令和二年

七月号

万象

B A N S Y O

ひろごりて たひらかの空、
土手づたひ きえてゆくかな
うつくしき さまざまの夢。

「朝の歌」より

中原中也

万 象

令和2年7月号

主宰作品 菖蒲田 内海 良太 4
 副主宰作品 桜 小林 愛子 5

風音集

. 飛高隆夫・江見悦子・柳澤宗正・原田しずえ
 山田春生・福島せいぎ・内藤恵子

続・万象と共に④③ 牛頭天王ごずてんのう 内海 良太 8

同人作品

内海良太選 9

同人作品の佳句 内海 良太 31

同人特別作品

石動山 井村 和子 32
 夏めく 大内佐奈枝 33

飛高隆夫自選句鑑賞⑮

茄子の苗つくづく見しが買はざりき 阿部 澄 34
 仲見世の裏や真昼の残る虫 片桐 帆一 34

福島せいぎ・内藤恵子自選句鑑賞③

托鉢へ脚絆を緊める初時雨 せいぎ 吉中 愛子 35
 はけ水に萍の湧きはじめてたり 恵子 石川 裕子 35

「写生の源流を求めて」を読んで②

短歌から俳句へ 穂苺 照子 36

「斎藤茂吉ノオト」から「万象」へ
 「風」から「万象」へ
 写生と余情
 安岡みさき 36
 芝宮留美子 37

万象基金のご報告
 松井佐枝子 37

特別作品評（五月号）
 沢辺たけし 38

同人作品評（五月号）
 成瀬真紀子 39

万象招待席 三島 暦
 望月 敏男 40

春夕 焼
 河野 尚子 42

万象招待席評（四月号～六月号）
 谷渡 末枝 43

万象ノオト「海」
 南場雅子、北口富栄、砂川道子、小坂橋泰山、大林彬彦、喜多恭仁子 44

郷土の俳人⑦ 埼玉 金子兜太（その三）
 山口 素基 46

俳書探訪
 曾根 満 48

巻頭作家（六月号）プロフィール 砂地宏子（武蔵野）
 中村 千久 49

万象作品

飛高隆夫選

万象作品の佳句
 飛高 隆夫 51

同人会便り 東京支部の五年間／珈琲ふれいく②

「万象」中央句会報（四月例会に替えて通信句会）
 飛高 隆夫 66

「万象」同人句会報（四月例会に替えて通信句会）
 飛高 隆夫 68

東西南北
 飛高 隆夫 71

菖蒲田

内海良

(主筆) 太

花菖蒲畝の切れ目は板足して

菖蒲田に自肅の夫婦距離保ち

岩つつじ古代地層の縞目濃き

雉鳴けり二三度羽を光らせて

ひきがへる師の句のやうに鳴きゐたり

下闇の疱瘡神に小らふそく

疫病えやみ憂し端午の空を見上げては

桜

小林

愛

子
(副主宰)

人影の消えてらんまんたる桜
鶏臭き風にかがまり野蒜摘
帰る雁籠りつづきの飯食みつ
新ウイルス震へ止まざる花すみれ
更紗木蓮落ちてたちまち地の糧に
人逝きて留処なかりし春の雪
喪心のすこし薄れて春満月

風音集



石楠花

江見悦子
(編集人)

剪定や榎大樹の闇払ひ
添うてよりまた離れたり花筏
近々とスーパームーン春の軒
やはらかな柞の芽吹空いつぱい
朝刊の思はぬ軽さ啄木忌
三密てふ新語や石楠花盛り上がる

春三日月

飛高隆夫
(万象作品選者)

初蝶はいつも必ず見失ふ
ひだるさや春の三日月はや沈む
散ることをじつと忪ふる桜かな
ひとひらの一気に誘ふ花吹雪
知らぬ間に雨降り過ぎし春の宵
春の夜の墓地の隣りの酒場かな

春かなし

柳澤宗正
(同人会長)

身の丈に余る若布を買ひにけり
人を避け^{コロナ禍}人に避けられ春かなし
落椿参る人無き百度石
ひとつづつ雀の散らす落花かな
兩岸の花を引き入れ春の雲
囀りの不意に頭上の木蔭より

北窓開く

原田しずえ

(顧問)

桜 鯛

福島せいぎ

(顧問)

嫁若し北窓開く沼の家
佐保姫の沼辺の芦にひそむらし
伊佐沼に榛の並木や春うらら
燕くる沼の葉師に詣でけり
草餅の売切れ沼の商ひ屋
初つばめ新河岸川に腹擦つて

花吹雪

山田春生

(顧問)

蜆の稚貝

内藤恵子

(顧問)

鎌倉の谷戸より谷戸へ春の蝶
コロナ禍や春の狭庭を散歩せむ
休校の空をかけゆく花吹雪
コロナ禍など俺には来ぬぞ春満月
ぶらんこを漕いで宇宙へとび立たん
春の夜や長寿の妻と食べくらべ

荒川の河口蜆の稚貝かな
今年また駅の窓辺に燕来る
花にらに埋もれてゐたり地藏尊
大銀杏花のみどりと葉のみどり
花馬酔木間遠となりし水琴窟
路地に咲く海桐の白さ夕迫る

のう
王 天
てん
頭 ず
ご 牛

内 海 良 太

七月の祭といえは京都の祇園祭があげられる。疫病神の牛頭天王を祀り、疫病退散を願う千年以上の歴史を持つ祭である。今の時世にぴったりの祭と思うが、あの暑さと人出は厄介だ。今年の祇園祭は山鉾巡行は中止と聞くが、どうなるのだろうか。

むかし、京都の人々は天然痘から逃れるために、家の入り口に牛頭天王の護符を貼った。当時はそれ位しか逃れる術はなかった。

私の町の八幡神社に「疱瘡神」と彫った江戸時代の石の祠が沢山並んでいる。天然痘が村に入るのを拒んだのか、流行の終息を願ったものか。私もこの祠に新型コロナウイルス災厄の早期収束を願って、あらためて詣でてきた。困ったときの神頼みである。

祠はどれもドカベン程の大きさで、その数は二十基ほどある。年号が彫ってあるようだが、摩滅してよく読めない。かろうじて「文化」と読める祠が二つほどあった。歴史年表を見ると文化十三年（1816）、「江戸で疫病流行」とあるので、この疫病がここ下総の鄙びた地まで及んだのだろうか。

古来より、疫病の流行は数え切れないほど発生している。ウイルスは人類よりも先に存在していたというのだから仕方が無い。「日本書紀」の崇神天皇即位五年には疫病により国民の半数以上が死んだとある。

天平九年には、一旦終息していた天然痘が再び猛威を振るいはじめ、政界の中心にいた藤原四兄弟（房前、麻呂、武智麻呂、宇合）が五カ月の間にバタバタ死んでいった。

この疫病は遣新羅使が新羅から持ち帰ったといわれている。もうこの頃から海外からの感染がはじまっていたのである。疫病の感染伝播は昔も今も変わらない。ましてグローバル化した現代では一気に感染のエリアが広がってしまう。

新型コロナウイルスの災厄は当分続きそうだ。早期の収束と、終息を願わずにはいられない。

同人作品

内海良太選



○は佳句に選ばれました。

札幌 松原智津子

斑雪野に乳房すれすれ牛放つ
清明の日矢水底の苔石に
春塵や開墾の世は馬糞風
練炊きし大釜土間にソーラン節
松前にやうやく届く初桜

札幌 岡本敬子

風不意に来る黄みどりの糸柳
休校子に水泡を立てず蝌蚪の紐
ひかりあり雪解の沢のリフキンクワ
かたくりに囲まれてゐて一人かな
街音なく今年片くり色の濃き

札幌 濱谷和代

ウィルスの終息祈る復活祭
木々芽吹く朝駆けの馬息荒し
春愁やガトーシヨコラのほろ苦き
古草の乾きの速き昼下り
土上ぐる小さき新芽の力かな

札幌 大内和憲

幼児のはじめは跳ねて青き踏む

一灯の衣桁がこぼす春埃
ふる里のアイヌコタンへ草矢射る
陽炎の涯は大河やトラクター
春の風絡めて疾走ランドセル

札幌 大内マキ子

春風に匂ふ神馬の寝藁かな
○前脚を揃へ仔馬は大地蹴る
蝌蚪の紐水の匂ひのまだうすき
なめらかに陽炎動く馬体かな
むらさきの稜線伸びて山笑ふ

札幌 落合裕子

夕闇の電線うなる雪解風
裏山の木々に名残りの雪の花
小糠雨いただき霽る木の芽山
背凭れに預くる総身目借り時
コロナてふ言葉ひねもす春深む

江別 佐藤哲

街に出る熊に手を焼き電気柵
大結氷ぎしぎし泣きて解けんとす
湾沿ひに張りつく岸辺鍊群来

最北の駅はかなしよ冬の月
こぼこぼと湯湯婆抱けりひとりの夜

苫小牧 林 陽子

納屋の戸を躍り出でたり朝燕
消えさうに色混じりたる春の虹
病める地球心折れずに桜咲く
ストレスを笑ひ飛ばして四月馬鹿
細波に光あつめて春の海

秋田 小松敏郎

買ひ変へし雪靴はきて転居せり
又一人友を亡くせり春の霜
海鳥の骸寄せられ冬の浜
寒燈や膝に眠る娘長睫毛
○半切の水波たたせ種浸す

鶴岡 阿部月山子

背に連翹前に瓢湖や欣一碑
竹筒に町屋の戸毎桃の花
北限の茶を守り継ぎて雛飾る
講宿の座敷百畳雛飾る
振れ啼きの初音を告げて去りにけり

新潟 佐藤 雄二

潮騒にかたかご揺るる裏弥彦
老二人コロナ籠りの日の永し
雪のなき越の山河のあつけらん
散る花に里の悲話聞く舟下り
春めくや一湾揺らす大漁旗

新潟 高橋 ひろ

連翹の花はれやかや雨の日も
菊の苗断り下手でまた貰ふ
紙風船吹き口へ貼る赤と銀
ぐし縫ひの針目不揃ひ菜種梅雨

○五頭五峯蒼々とあり春田打

南魚沼 森山 暁湖

春の鳶澄みたる声を降らせけり
開拓碑の裾びつしりと黄水仙
昨夜の雨晴れて村中溝浚へ
○蝶双つ一兵卒の墓めぐる

家中の鍬の柄締むる春日向

益子 光岡 れい子

百年の暖簾下すや春の蝶

不揃ひの刺子の針目木の芽晴
ゴスペルの声の昂り春の虹
ダンクシュートの猿の辻芸花の昼
朝の日を吸うてまぶしき銀杏の芽

芳賀 大村 かし子

留学子無事に帰国や青き踏む
佳き便り来さうな朝や囀れる
閑散な街に報知や花の冷
春嵐息つぎなしの風見鶏
天を向き古木に凜と牡丹の芽

芳賀 見目 トキ子

風光る草木の鼓動はじまりぬ
雑草に負けずと芽吹くこぼれ種
触れ合うて光り合ひたる猫柳
飛花落花地に明るさを移しけり
卒業歌鍬を休めて聞いてをり

宇都宮 阿久津 勝利

ドローンの映し出したる山笑ふ
朝市や百人分の浅蜷汁
千本の桜見下ろす天守閣

残雪や窯場に近き薪の山
大海へ曲りて太る雪解川

栃木 上岡 佳子

ゆるやかに曲がる長堤花明り
花の雲棚引く八溝山地かな
こふのとりの初の巣組みや遊水地
大野焼煙が龍めく麒麟めく
三龜山の青海波めく芽吹きかな

佐野 亀田 やす子

人気なき校舎校庭飛花落花
柳絮追ひ童女となりて了ひけり
遠目にも貝塚白し鯉幟
谷中湖の風捉へたる花通草
桜桃の花の目立たぬ朝かな

佐野 増田 幸子

桜かくし筆筒にさす体温計
蜥蜴出づ細き尾ついとまるめては
藻の石を真黒に群るるお玉杓子
水音のたえぬ池尻濃山吹
夫とよく逢ふ乱世の春の夢

佐野 駒形 祐右子

○初咲きの牡丹を夫へ供へけり
芭蕉の句添へて四月の患者食
大草鞋見上げてをれば燕の子
春嵐えやみは天の罰かとも
花の屑浮かぶ知足の蹲踞に

佐野 加藤 季代

蝌蚪の紐たましひいくつ宿したる
桃さくら満つる秩父に兜太亡し
天上を指す手に甘茶奉る
杖音に増ゆる水輪や春の鯉
電波塔に眉月かかる恋の猫

佐野 鍋島 広子

芦芽組む遊水地の土やはらかし
鉄塔に巣組み始むるこふのとり
囀の室の八嶋の杜暗し
里山の飛花の一陣阿弥陀堂
関八州見晴す山に草団子
葦焼の灰谷中湖にたゆたへり

佐野 阿部 澄

草の根の青く残れる焼野かな
外井戸の小さき流し桃の花

○濡れ縁に土筆を置きてそれつきり
羽の色まだ調はぬ初燕

佐野 芝宮留美子

うぐひすの声に啼き止む土塊鳩
ざわめきし枝垂桜の中に立ち
一人静出づる新芽の松皮色
木の芽晴さしばを襲ふ鴉かな
真緑の蒼いつしか大でまり

佐野 島田和枝

葦牙や甲羅干す亀首のばす
木の芽風振子時計の鳴る駅舎
折鶴にふつと息ふく連翹忌
筍掘り足裏で探る頭の尖り
あさぎ吹く漣光る浅瀬かな

佐野 茂木弘子

風光る鶴鶴睦む遊水地

蘆牙や煤の匂へる遊水地

○卵焼く真つ正面に春の雪

苔生ふる水車の送る春の水
カウンターの瓶にほぐるる楓の芽

足利 大木

茂

顔半分覆ふ会釈や菊根分け
毛の国の芽吹く山並烟りけり
花吹雪忠治の墓は柵の中
メモリーが一瞬に消え四月馬鹿
夜通しの疾風静まり木の芽雨

土浦 澤

照枝

弘法のお手植ゑとして緑摘む
官衙てふ遺跡の丘の芝青む
一斉休校の庭葉桜となりけり
郵便で届く卒業証書かな
食堂のおばちやんに謝し卒業す

さいたま

山本右近

玉垣を蝶の翳過ぐ光悦忌
春泥や松葉模様
脚の跡

疫籠りする二階より遠ざくら

花冷や台目疊に湯の滾り

布目あとしるき豆腐や法然忌

志木 中 村 千 久

曇る日のさくら妖しきまで白し
咲き満ちて桜かくしに枝垂れたる
どの花も蒼はみどりチューリップ
扁額の一字手ごはき日永かな
手をはなれ風船の空広がりぬ

所沢 三好 かほる

櫻 咲 く 光 秀 祀 る 古 社
左近の櫻幹に手当の黒き布
料亭の梁の太さや御殿雜
燕来る京の大橋はすかひに
朝櫻粥ふつくらと炊きあがる

所沢 南 雲 秀 子

藍碧の奥多摩の湖桜どき
濃淡の桜あやなす入間川
川沿ひの桜見下ろす本丸跡
連翹の角まがり来る園児バス
入間野の茶摘を待てる畑かな

入間 山 口 素 基

黄桜の咲くべき白のととのひぬ

空へ舞ふ花醍醐てふ花吹雪
あちこちの門燈点る夕桜
花筏象の小川を流れけり
三山を一望にして土筆摘む

千葉 田 中 道 江

桜の色濃くなりけり雪の中
春の雪ひとひらづつの形あり
コロナ禍の桜は白しと思ふかな
花屑の渦吹き上り本堂へ
植木市いつもの隅にエシャロット

酒々井 竹 澤 竹 里

枯山水花を浮かべて大海へ
藤の花踰踞の水に影落とす
囀りや茶を嗜みし緋毛氈
桜蕊踏みしめ参る段葛
砂場にも人影は無し桜蕊

酒々井 中 嶋 久 登

弥生尽実印の溝なぞりたる
線香の種火囲むや彼岸墓地
新入生の歩道に新た黄色線

料峭やらふそく二本太子堂
春の月団蔵偲ぶ虚子の句碑

佐倉 内海保子

ランドセル大きすぎる子チューリップ
雉鳴いて横利根白き波たつる
春の雷一言主に一つ鳴る
子が生れ村入口に鯉のぼり
播鉢の木の芽の匂ふ夜の雨

佐倉 大内佐奈枝

風光る河口へ利根川の滔々と
杉菜生ふ除染袋が野を占めて
濃く淡く松虫姫の遅桜
ひとまはり大きな鉢に菊根分
行く春の本よりひらり正誤表

佐倉 三屋英俊

遅き日の子や逆上がり出来ぬまゝ
鋤き返す畝に湿りや鳥雲に
春荒や扉褪せたる方丈記
蓮如忌や祖の墓残る一揆の地
薰風や梯子一氣に老大工

佐倉 横川良子

土塊の黒深くして春の雨
綿雲を映す野川やつくつくし
蘆牙や舐さし直す沼漁師
補助輪を外す勇氣や桜の実
長雨に公園花の浄土かな

四街道 奥 太雅

積み上げし土囊のほつれ草芽吹く
ウイルスに鎖国ふたたび亀鳴けり
寄生木の毬のさみどり木の芽晴
今懸けし巣箱の見ゆる書齋かな
耳鳴りを忘れてゐたり昼蛙

四街道 塗木翠雲

ものの芽や白き翳さすレントゲン
真砂女の忌いよよ艶増す紫木蓮
夫が打ち妻が均せる春田かな
彼岸西風国境のなきコロナの禍
いには野の光の中を麦青む

船橋 山下良江

庭隅の今年も出合ふ蒔ばんば

廃線の枕木を跳ぶ日永かな
筑波嶺の風来る通り雛飾る
○ウィルスを逃す北窓開きけり
蜜蜂の花粉だらけの口拭ふ

船橋 大山 春江

照り返すソーラーパネルに黄砂降る
花の道手押し車にもたれつつ
徒長枝に連なる梨花の白極む
時疫の空を自在のつばくらめ
葉桜の色の深まるはやさかな

船橋 赤堀 洋子

風がうがう彼岸桜の空青し
コロナ禍や彼岸会の堂開け放ち
初つばめ青空切つて池擦つて
その上に薄き半月花の雲
春疾風砂塵のなかの小学校

船橋 久保 村淑子

風荒し白山吹の咲く頃は
樟芽立ち鎮守の杜のめざめけり
桜吹雪止むことのなき日暮かな

あえかなる風をとらふる花ふんどう
春雷や友今まさに茶毘に付す

船橋 片桐 帆一

春障子切り貼り明りさくら色
桜散り込む金太郎飴の店
裾に付く土筆の粉の青きこと
一人蹴るポール砂場へ春の昼
誰れも居ぬ塩田跡地四月尽

船橋 宮本 加津代

ふくらみのまだ定まらず猫柳
侘助や夫亡き日々の三年経し
夢に來て夫のほほ笑む春彼岸
一枝の揺れにはじまり花吹雪
花吹雪手を泳がせて一輪車
○素人の筍掘りとわかる傷

和 山本 とく 江

菜の花の土手ゆるやかに川曲る
初燕蔵町の路地曲るとき
明烏うすくれなゐの春の月
故郷の馴染の訛り苗木市

引く白鳥頷き合うて飛び翔てり

柏 内 田 郁 代

姉妹弾く駅のピアノやスイトピー
春の雪閉館となる鷗外荘
又一軒空き家がふえて落の臺
○摘んで来て土筆四本持て余す
葱畑を走り出でたる雉子かな

柏 古 川 京 子

白樺の瘤は勲章山笑ふ
荒鋤の湿りに芹のあをみたり
田を這うて夕日の土手へ雉の声
筍飯在宅勤務に差し入れす
ウイルスのひろまるはやさ龍天に

流 山 沢 辺 た け し

満開の桜のあをむ水明かり
天と地を乗せてくるつと石鹼玉
○蟻穴を出て水音に引返す
木道の尽きてやはらか春の土
木葉木菟ひらく片目に花の風

流 山 穂 莉 照 子

花冷えの町に染み着く醤油の香
春愁やビリケンさんに白マスク
きらきらと運河に解くる花吹雪
散る桜ひとひらづつに日をのせて
ぼうたんに雨爛漫と砕けけり

浦 安 田 中 幹 也

○春暁の沖のむらさき船団出づ
水底の舟の上行く花筏
栃咲くや木立に透くる山の色
さまざまなものにほひや春夕焼
将門の塚葉桜の香の中に

東 京 谷 田 部 栄

春浅し久闊述ぶる通夜の席
括られしままの桑の枝芽吹きけり
雉一声峡の空気の締めりけり
鎌倉のここにも寺や梅の花
馬術部の並足速足風光る

東 京 須 賀 允 子

落花また落花摺まん子ら走る

磴百段登り切つたる初音かな
山藤の樹々にからまる高さかな
拜殿の古びし几帳花の冷
行く春や一休賞でし一節切

東京 降幡 加代子

上水の細き流れや蟻の径
塀の外黄を極めたる山吹の花
草々に紛れ紫堇咲く
花片の傘に付くとは知らで行く
メンデルの葡萄生き／＼芽吹き初む

東京 名 和 政 代

春の朝パン一切れと体温計
六甲の群羊放つ春みぞれ
葛飾や朝日に弾む揚雲雀
我慢競べ青葉若葉の町となる
四谷土手桜さくらの白さかな

東京 藤 田 裕 子

少女わが習ひし運針マスク縫ふ
お手玉の小布あはせの日永かな
思惟仏のごときうたた寝春の昼

チューリップの一本卓に誕生日
藤盛り肩車して通りけり

東京 赤 松 郁 代

音絶えて花にかぶさる春の雪
老犬と合はす歩巾や水温む
春の風入れてオペラの窓と窓
竹の子をさぐる爪先急斜面
小流れに渡す木橋や畦青む

東京 島 野 ひ さ

昨日より今日の朝日や楓の芽
諸葛菜急行電車の窓よぎる
ポランティア一人鍬振る学校田
城趾の土塁を埋む落椿
まよひ道迷ひまよひて二輪草

東京 佐 藤 晴 子

今年また花筏美し目黒川
ものの芽に触るる指先清らなり
麗らかや活字するする読み進む
桜散る御灯の一つ女人堂
神門尾山神社にてのギヤマン透かす春夕焼

東京 加賀葉子

劍玉を鳴らす日がなや籠る春
○下泣きや海棠の下に金魚埋め
散る桜ころがる径の明るさよ
花房の乱れてをりぬ夜香蘭
釣具屋の屋根にまろびて恋雀

東京 久留島規子

籠城の見えざる敵や万愚節
欄干の真中花見の警備員
憂きことを覆ひ尽くせよ春の雪
やまぶきや急行列車過ぐる土手
囀のテラスにホットチョコレート

東京 下嶽孝一

少年院の塀に陣取る恋の猫
田安門の空を染めぬる朝桜
剣豪の小次郎の墓囀れり
黒潮の紺たたみ来る春の浜
あつと口開けし目刺や朝の膳

東京 杉浦一子

朝桜普賢菩薩に会ひにゆく

花筏淡き色のせ神田川

篋を音なく抜くる桜まじ
新高輪ゲートウェイ駅に人集りする春一日
朧夜や影絵の如く街灯り

小平 吉村光子

ひそと咲く御衣黄の花わが愛す
蔓薔薇のひらかんとして濃く匂ふ
風わたる苗代の苗整然と
栗咲く香栗の生命と思ひけり
今年竹伸びゆく力我に欲し

立川 疋田華子

農小屋に添ひて一列花すみれ
曲りたる畝に種まく貸農園
初蝶の一と巡りして草に消ゆ
囀や野川の流れゆつたりと
コロナ禍の真白な手帳春闌くる

町田 吉中愛子

百歳を昨日に杖の灌仏会
潜りても三つ葉つつじの下にをり
たたみ癖のこる初蝶翔ちにけり

子と春筍抱き藪より男かな
虫のせてのたりのたりと花筏

町田 広 瀬 俊 雄

北条の山城跡や桜散る
画眉鳥の声のはげしや花辛夷
路地裏の沈丁の香を曲りたる
花薺の一面白き休耕田
春霞一寸ほどのスカイツリー

町田 桔 梗 純

朝の日にほのかの紅や糸桜
玉堂の色紙を選ぶや春の雨
新芽伸ぶ紫陽花壺に生氣満つ
春の雪大き長靴取出だす
霞みたる街の高層灯の点る

日野 喜多尾 明子

宮参りの赤子のあくびうらけし
草餅や巢鴨商店街濡れて
猿田彦の赤き半纏春しぐれ
春昼の都電早稲田へ下りゆく
学習院の馬場がらんどう花は葉に

青梅 小林 珠 江

春北風や萌ゆるものみな光らしめ
菊根分色を記せし札添へて
虹迷ふほど野の花の黄を競ふ
○地下足袋の小鉤に残る春の土
ほろほろと蹠踞に落つ花馬酔木

横浜 榎 本文 代

一合の飯炊き上がる朝桜
薬湯の煮詰まる匂ひ花の雨
子ら去りてふらここ二つ揺れてをり
初蝶の黄色見し日やちらし寿司
春キャベツ楽しき音を刻みたる

横浜 西 本 才 子

温度差の目まぐるしさよ三月尽
隙のなく土手さみどりに杉葉かな
沢音や山葵盛る箕の浸しあり
湿原に細き流れや蘆の角
手を伸べて胸に飛び来る別れ雪

横浜 川 越 昭 子

マンションの屋上歩く日永かな

真つ白に梨咲く道を選びけり
正面にさくら色なる春の富士
満開の桜青空かくしけり
大屋敷に水車の廻る桃の花

横浜 久松 和子

花見船すれちがふとき盃掲ぐ
弥生尽病魔の息の猛々し
落つる鍵探すポシエツト四月馬鹿
花屑を船いつばいに積み帰る
春昼にリヤカー並びゐたりけり

横浜 大橋 雅子

蚕豆の花揺れ黒目際立てる
金茶色の葉の寄り添ひぬ八重桜
休校の花壇茎立盛んなる
客減りて店閉づる道花吹雪
急逝の知人の家や松の芯

横浜 山崎 郁子

凍裂の高き音かな校舎裏
春耕の袖ヶ浦過ぎ豚舎見ゆ
若鮎の急流となる木曾路かな

花菫の庭に放すや烏骨鶏
濡れ縁のペンキ塗り終へ春一番

横浜 田賀 模恵

白梅や標は仮名の旧字体
夕おぼろ亡夫^{*}似の人と擦れ違ふ
春の星大樹の梢にかかりをり
川底に波の影あり春深し
若楓枝の先まで明るくて

川崎 山口 千代子

不忍の池を二つに花の道
たけなはの春に音なく雪しんしん
青空より滝の如くに咲くさくら
てらてらと光を放つ柿若葉
駐在の巡回中や雛あられ

川崎 新妻 奎子

焼きあがるパンのかをりや春の雪
入彼岸花束抱へ夏目坂
亡き人の誕生日くる遅桜
がさがさと嵩張る葉養花天
自肅の世春満月の赤き色

○潮騒や朝の砂地に松露掘る

川崎 大久保 進

一隅に齡の妻の内裏雛

モルダウの楽の流れや目借時

桜餅白磁に残る葉の匂ひ

鉄橋をどですかでんと花の旅

花冷の鏡の中に無精髭

鎌介 恒 川 清 爾

極楽は退屈たりし春の夢

父茶毘せし高き煙突月おぼろ

亀鳴くや『若きウエルテル』老いて読み

大仏の首に継ぎ跡風ぬくし

目盛濃き石の日時計夏隣

横須賀 織 田 み さ る

飄々と生きて八十路の桜かな

遠嶺の近づく気配春深し

朗々と読経のもるる若葉かな

透明に揺れて居るだけ蝌蚪のひも

貝殻の内側白し春夕べ

茅ヶ崎 三 澤 治 子

父母の墓桜の芽立ちくれなるに

春の月隣町より付いて来し

春の波砂に広がり消えにけり

着膨れてチャックいぢくり布を噛む

花満月のぼらせ給ふ花御堂

伊勢原 佐 藤 和 子

鳥帰る心敬塚の薄暮かな

日に三度測る体温花の冷

空つぼの小鳥の卵うすみどり

入相の畑や雉子が子をつれて

菜の花に退屈さうな牛の声

秦野 佐 藤 嘉 洋

まんさくの花空谷を明るうす

花の雲青くまぶしきダム湖面

若枝に力ありけり八重桜

山寺の階長し花御堂

冴返る湖心の杭に鷺一羽

松本 中 條 今 日 子

雪嶺の澄みわたりたる夜明けかな

春を待つ湯殿で歌ふ数へ歌
ぞくぞくと庭の隅より落のたう
雑布の十枚仕立て針供養

○残雪や乗鞍岳の鞍白し

富士 神田美穂子

浅春の無垢の青空無垢の富士
野火点火戦車の轍残る野に
啓蟄やドリルの穿つアスファルト
嚙りへ耳を傾けマスク縫ふ
キヤツシュレス決済にて買ふ桜餅

静岡 大村峰子

カーブにはカーブの形の春落葉
営巢の下見か蜂のうろうろす
崩落の谷に影差す山桜
踊り場に立たされし日よ葱坊主
蟻運ぶ花片帆掛け船のごと

静岡 海野みち子

夫婦句碑枝垂桜の風の中
夫植ゑし花片栗の色の濃き
筍飯遺影の夫へ真つ先に

鶯や一人詣づる夫の墓
菜種梅雨野良着繕ふ縁に座し

静岡 宮崎知恵美

峡の谷初音空より降るやうに
初蛙四肢を踏んぱり尻を振り
春うらら夢に姉きてよく笑ふ
辛夷咲き山の小さくなりにけり
蝌蚪の国飛び出すほどに混み合うて

静岡 長島操

内裏雛飾る仏間を狭くして
蔓籠を編むや柚女の今日雨水
芥焼き啓蟄の土燻したり
まんさくや金山跡へ橋渡る
雛飾る還暦となる長女かな

静岡 岩崎武士

鍬の柄に楔打ち込む穀雨かな
剪定の松に新たな匂ひ立つ
しばらくは無言で浴ぶる花吹雪
折一つ酒一本の花見かな
寝る前のズボンの寝押し昭和の日

静岡 曾 根 満

吹き上ぐる風に谷鳴る遅々と春
耕や野に還る畑またひとつ
峠路や斑雪の香り右ひだり
茶どころの村に寝釈迦の抱かるる
石仏の衣のひだに涅槃雪

静岡 藤原千代子

旗振りの無線ざわざわ蜥蜴出づ
蛙合戦残党二匹草に消ゆ
くるくるつとパスタのフォーク初燕
抽出しに猪の牙進級す
農具屋の油の土間や燕来る

静岡 荻野加壽子

二親に一つのあかり桜餅
亀鳴くや何が本当で何が嘘
○霾晦地球傾ぎて回りけり
使はずの姉の文箱や桃の花
合鍵でつくる合鍵三鬼の忌
山椒の花やよく知る路地の奥

静岡 小川 明 美

温度計掛くる蔵口地虫出づ
碑を探す古道の花馬酔木
せせらぎの木橋の軋み春菜畑
収穫の春菜へ春菜積み上げて
柵内の子ども農園葱坊主

静岡 藤本 節 子

草萌や麻痺の右足先づ一步
囀や兄ちやん真似て逆上がり
飛花浴びてダイサービスのバス止まる
少年の夢は飛行士しやぼん玉
湧水の砂の起伏や初燕

静岡 大 長 文 昭

春泥やどこのどの道曲がらうか
花の雨木花開耶姫つつむ
鉄錆の浮かぶ沼べり蘆の角
調教の馬の速足さくら散る
初花や正直訳書『自由之理』

静岡 加山ひさ子

小流れを跨ぎて洗ふ田芹かな

ことの外うるむ春星母の星
父作る巢箱の穴の楕円形
母の墓訪ふや落花のひたすらに
春の風邪ホットミルクに角砂糖

静岡 吉野美智子

朝夕を梯子に覗く巢箱かな
板摺の蔭に香りの高まれり
盆栽の苔むす松や緑立つ
葦の角水の底より泡立てり
獵期果つ納屋に吊りたる猪の肝

静岡 石川裕子

外つ国に貰はれてゆく捨雛
百羽折り千羽鶴てふ四月馬鹿
途切れなき木魚の音や山桜
納骨堂の扉半開白蝶蝶
蓬餅綾子句集に太郎の字
ここよりは身延道なり菜種梅雨
春疾風波の頭を攫ひたる
マネキンの乳房の尖り春セーター

静岡 望月敏男

○春の夢俺より若き父のゐる
地下足袋に獣の匂ふ獵名残

富山 若島久清

花の城千歳門より案内さる
梨咲いて呉羽丘陵暮れ遅し
脇目せば手元の狂ふ梨授粉
春山の熊対策に知事囲む
雪型の絵解き互ひに距離たもち

射水 成瀬真紀子

潮溜りにちぎれ石尊や有磯海
追はれしがいつしか追うて春の夢
○散り敷けるどんぐり一つ芽吹きけり
円墳を一気に登り雉鳴けり
春光や連山白を競ひ合ふ
子に乗するちやうど良き枝大桜
風邪癒えし子の食欲や春近し
冬終るドラマの嘘に涙して
風に哭く能登の岬や雪割草
夢捨つる如く風船放たるる

金沢 岸川素粒子

○田に古りし政党ポスター冴返る
畑打つや兔に残す木の根つ子

金沢 田村 愛子

雪吊をはづす庭師は優男
ギヤマンの神門くぐり飛花落花
花吹雪雁行橋に昨夜の雨
茶屋街やぶつかりさうに初つばめ
落椿掃き寄せ坊守留守なりき

金沢 井村 和子

春の風邪二人静かに月曜日
菜の花の蝶と化したる誕生日
こほろぎ橋あやとり橋と花吹雪
地べた市蕨ぜんまい並べあり
月読の光いただき夜の桜

金沢 中條 睦子

山菜莢にまつすぐ届く講の鐘
ねんごろに手を洗ふべし桜餅
日々増ゆる罹患者花は散りはじめ
耶蘇谷へ一筋の径花董
不意に出る師の言の葉や華鬘草

金沢 今越 みち子

大学へだらだら坂や花吹雪
枝先の桜に頬を寄せにけり
川端の桜へ日矢の太きこと
雲の形変はる早さや若緑
黒文字の花付く枝を手折りたり

金沢 伊川 玉子

雪椿一鉢買うて旅果つる
一笑塚くわりんの芽吹く雨来たり
濯ぎたる法衣一竿初蛙
珠洲焼の鉢に根付きし花すみれ
今の世の沈黙守り春マスク

金沢 伊藤 美音子

白梅の触れし指もて赤子抱く
閻王の堂の冥々地虫出づ
桜東風胸を反らせて風見鶏
信心はそこそこなれど蓬餅
山路来て日本蒲公英がれなし

金沢 高田 たみ子

犀星の水汲みし川初燕

医学部の裏荒れしまま貝母咲く
補聴器にとどく川音青き踏む
黒椿ひつそり咲ける殉教碑
水芸の芸妓の像や夕桜

金沢 後藤 藤 桂 子

水音の奏づる棚田春夕べ
春耕の蓮如の里や風渡る
春疾風馬の横腹波打ちて
涅槃寺志功の菩薩そこここに
○花冷や板戸はみ出す志功の絵
花まつり僧が明治のピアノ弾き

金沢 豊田 高子

大槻に万の芽吹き模絵 華厳松の鼓動かな
花冷や筆致に志功の息遣ひ
朝桜法螺鳴り渡る吉野山
○咲ききつて雲の色なる山桜
浮雲や牛は野に寝て春うらら
滝桜風の童子の宙返り

金沢 松井 佐枝子

泉水の椅子に春愁置き去れり

瓦斯灯の及びし川面花万朶
殉教の谷囀りの響き合ふ
しんと立つ庭の貝母や訃報聞く
少年の突如登りぬ花の木に

金沢 石川 純子

家壊す重機の音や春愁ひ
金花糖の鯛の尾跳ぬる雑の壇
野遊びの小さき子の手に握り飯
川風に犀星偲ぶ花杏
仕立良き母の針あと春深む

金沢 河野 尚子

紗網仕掛け能登路の春となり
黒ずむほど雀集まる桜一樹
尉鷄今朝の声張る大桜
朝な夕な覗く農小屋燕の子
学校のチャイム聞こゆる花菜風

内灘 塩井 志津

茶屋町の小さき茶房の春炬燵
つちふるや波濤越えきし太湖石
極彩色の一両電車山笑ふ

さへづりや疫病祓ふ社叢より
等伯の松林図めく春の靄

七尾 谷 渡 末 枝

カーテンを閉ぢて朧の月あかり
花の雨サンドイッチの売れ残る
機織や見飽きし窓を春の影
蛙鳴く昭和の家の縁の下
異動販売車筍飯のほのぬくし

敦賀 石 田 野 武 男

花烏賊をさばく板場の能登ことば
南蛮煮よき香りして三の午
啓蟄や肩がつしりと黒部牛
石仏に涙一つぶ利休の忌
○黒鯛のはがねの光り糶り落つる
雄心を押し通しけり鱒漁夫

敦賀 山 本 麓 潮

ここよりは丹後街道雁帰る
仏足石翹をたたみて春の蝶
梅東風や湖の波の穂白々と
宿駅のせせらぎ早し青柳

○傾ぐほど引き揚げられて若布舟
コロナの終焉願ひつゝ比良八講

敦賀 倉 谷 紫 龍

梅一輪利休茶室の藁の壁
○韃陀の修羅の火の粉や送水会
店頭の大笹に跳ぬ鱒の尾
穂の芽や太閤よりの古茶釜
薬や茶室戸口のかたな掛け
鳥雲に引き潮に立つ朱の鳥居

敦賀 倉 谷 ます 美

浮き上がる海女の手しかと海胆にぎる
蛇皮線の模様 of 荒し花見莫塵
小次郎の茶屋に草餅焼く香り
茶道具に蒔絵の気品雛まつる
花守の茶屋一隅に安らげる

敦賀 靄 田 勝 子

百軒の戸口華やぐ雛飾り
青麦や道一本の和紙の里
阿蘇五岳裾野を野火のはしりけり
瀬戸内に鱒を焙る夕けむり

貝寄風や岩千畳を波はしる

徳島 福島 吉美

野遊びの川原に開く遊山箱
スコップで炎あやつる畦焼女
掬ひたる白子に透ける黒目玉
阿波三峰臨む峠の花馬酔木
麗かや丸みをおびし志功の画

徳島 村上 和義

咲き満ちて今年の花にある憂ひ
摩尼車回す幸せ牡丹寺
奥祖谷にぼつんと一つ春灯
大漁旗掲げし田んぼ水温む
○宰相の嘘に飽きたる四月馬鹿

徳島 宮西 修一

犬小屋を覗きてゐたる子猫かな
恋猫に声を掛くれば睨まるる
波濤草かな書きすればやはらかし
潔くふと枝落とし剪定す
復活祭Uターンして農を継ぐ

室戸 安岡みさき

脱藩の山より流れ花筏
花散るや二十三士の処刑跡
○春潮の岬の鯨見櫓かな
句敵てふ仲良し同志花の下
出不精の夫を連れ出す花見かな
浦人は皆声高し花の下

高知 仙頭宗峰

忠魂碑悲し言の葉桜散る
花冷や又も詮なき愚痴こぼす
長閑かさや潮吹き上ぐる鯨岩
名園に摘まるる定め緑立つ
春潮の香る土産の屑珊瑚
○室戸路やはや傾ぎ癖松の芯

長崎 丸本祥夫

修理中の艦船脇をペーロン船
百年の九寸柱水羊羹
唐寺の夕日まみれの棕櫚の花
うきくさより片脚垂らしあめんぼう
ごみ蓋を落とし騒げる梅雨烏

那 前田 貴美子

春眠の胸へ季寄の春ひらく
うりずんの風を広げて傘干せり
御願所の粗き木洩日陸おががうな
清明の野へあたらしき日照雨過ぐ
あかゆらの花黒猫の深眠り

那 大 湾 宗 弘
※あかゆら＝梯梧

○はまう浜下りのひかがみに日の照りかへし

陸寄居虫さぎえの殻をおもさうに
清明の猫にがさうに水を舐む
鎧戸に小さき貼紙つちふれり
春雨の舗道や外出禁止令

那 比 嘉 半 升

三階の空を開ければ花梯梧
母子像の乳房ゆたかに靄れり
学徒の名触れたる指に春の冷
岩鼻ににぎり飯食ふ啄木忌
蓬の香手ぐさに帰る夕まぐれ

那 當 間 シ ズ

龍潭にさみどりの風さざれなみ
春昼の地べた商ひ書に耽けて

春耕や婆の遠目に久高島

鱧油船の制止油の香残る廃船うりずん南風

先生も生徒もねり衆三月祭サンクヰチヤ

那 中 本

清明の丘に戦記を辿りゆく
慰霊碑へ海光満てり花ゆうな
毒秘むるオオゴマダラの優しさよ
身の内に古譚の風や梯梧咲く
春潮や宮の柱の朱を極む

宜野湾 吳 屋 菜

々

悪疫の世や清明を家籠り
春寒や爆音過ぐる枕上
石組みて香炉となせりうりずん南風
勾玉の祝女の首輪や花梯梧
○燃え残る黒線香や雪加鳴く

西原 宮 城

勉

清明の風のががよふ樹冠かな
緑立つ負けて荷を負ふ下校道
龍潭を姿見にして鳥の恋
春筍来自肅氣遣ふ便り添へ
野遊びの丘の岩陰歩兵の碑

清

同人作品の佳句

内海良太

濡れ縁に土筆を置きてそれつきり 阿部 澄

春の野で笹一杯に摘んで来た土筆だが、さてどのように調理をしようかと思索するうちに、すっかり忘れてしまった。「それつきり」の投げ出したような言葉が面白い。

卵焼く真つ正面に春の雪 茂木弘子

卵焼のいい香りがしてくる。厨房の窓には大粒の春の雪、春の雪は大粒なほど美しい。卵焼と春の雪、句に淡い色彩感があつていい。

春の雪青菜をゆでてゐたる間も 綾子

細見綾子先生は春の雪を好んだ。「綾子俳句歳時記」には春の雪の句が沢山収録されている。

ウイルスを逃す北窓開きけり 山下良江

冬の間閉め切つておいた北窓を、ようやく暖くなつてきたので開けるといのが季語の本意。この句はウイルスを逃すのに開けたというもの。今年の冬から春の疫病の未曾有の流行を句に留めたもの。社会性と記録性のある句だ。

潮騒や朝の砂地に松露掘る 新妻奎子

松露は晩春のころ、海浜の松林に生える2センチほどの球状の茸。香がよいので汁にいれたり、茶碗蒸にしたりする。

以前、友人と小松の安宅海岸の松林に松露掘りに行ったことがある。やっと一つ見つけて大騒ぎして喜んだことを思い出した。新妻さんの句には言葉の一つ一つに美しい響きがある。私の体験のような物欲しさが無い。

残雪や乗鞍岳の鞍白し 中條今日子

乗鞍岳は大規模な火山群の総称、3061の剣ヶ峰が最高地点。頂上部のたるんで見える姿が馬の背にかける鞍に似ているので鞍ヶ峰といわれ、乗鞍岳となった。

中條さんは松本にお住まい。四季の乗鞍岳の姿に親しんで山容の変化を即物的に捉えて我々の前に提示してくれる。残雪の鞍の部分が眼に浮かぶ。

春潮の岬の鯨見櫓かな 安岡みさき

昔の捕鯨の勇壮な絵がある。「古式捕鯨蒔絵」は大きな鯨に多くの和船の漁師(勢子)が鉾や槍で挑んでいる図である。

作者の南国土佐も和歌山の太地も古式捕鯨で有名。共に岬に鯨を見張る櫓が今でも残っている。春潮を見ながら捕鯨の図を思い浮かべているのであろう。物を提示するだけで、後は読者の想像に任せるといふ俳句である。

霾晦地球傾ぎて回りけり 荻野加壽子

地球は地軸を23・4度傾けて太陽の周りを回っている。とだけいっては味も素っ気も無い。毎年春先になると中国方面から砂塵が飛んできて日射量を少なくする、これが霾晦。改めて「地球傾ぎて」と当たり前のことをいっているようだが当たり前ではない。言葉の力である。

石動山 井村和子

靈山へ踏み入る十歩落し文
 樵林三光鳥の声降り
 願掛けの丸き石積む玉の汗
 弘法の池を気ままに源五郎
 万緑の底ひへ修験の径消ゆる
 天平の古絵図と語る日からかさ
 役行者祀りし堂や蟻の列
 梅の宮跡なる礎石ただ灼くる
 焼討の後の歲月山滴る
 海遙か風車に遊ぶあいの風



能登・越中の境界にある石動山は標高565米の国指定史跡の「歴史の山」である。高台にある石動山城址の眼下には堂塔、院坊が点在。遙か日本海が光る。江戸時代、石動山天平寺は56坊を持つ眞言宗の古刹であったが、宗徒の謀反に端を發した上杉と金沢勢の合戦で山中の院坊の多くを焼失。近年、格式高い大宮坊が復元されたが、梅の宮、剣の宮等の跡には礎石のみが残る。発掘された五重塔の礎石には、凄まじい兵火の物語るかに焼痕が生々しい。

夏めく

大内佐奈枝

城跡の何処に佇つも花吹雪
人を避け人を離れて花疲れ
親爺ひとり営む床屋沈丁花
どつと生れ行方の知れずしやぼん玉
道山の一代記読む余花の雨
目の痒くなる芍薬の花の頃
代搔機畦に田草を噛みしまま
田水張るモーターの音畦伝ふ
代田水城の裾まで迫りたり
見はるかす田の平らかに鯉幟



新型コロナウイルス感染症がパンデミックになり非常事態宣言が出され、外出はなお一層の自粛という事態になってしまいました。

各所の句会も中止。投句というかたちで行われていますが、皆様にお会い出来ないのは淋しい事です。

コロナの終息が見えない不安のなか落ち着かない日々ですが、じつと耐えてコツコツと俳句を作り続けて乗り切りましょう。

自然には季節の移ろいが確かにあり、田も畑も動き出してしまいました。

茄子の苗つくづく見しが買はざりき

第三句集『暮色』所収の句である。一読して句意明瞭、俳諧味がある。茄子の苗に目を留め、じっと佇む作者の姿が浮かぶ。同じ真に並んでいる句（地に錆びて朱色や泰山木の花）も同じように即物具象の句で、あとがきに「心引かれた対象を凝視し、何かを発見し、それを表現し得たと感じた時、その対象は自分の世界に取り込まれ、それだけ自分の世界が拡充したと思われる」とある。

茄子の苗は種類も多く、三十センチ程に育った苗に小さな苔の付いたものもあり、一般的に五月の連休頃に植ええられる。作者は茄子の苗を前にし、今年は思い切って植えてみたいと、よくよく苗を見比べ、手も染まりそうな瑞々しい茄子を思い浮かべたであろう。茄子に徒花は千に一つもないと聞いているが、経験がなければ殊の外茄子作りは難しそうだ。やはり素人には無理であろう、苗は買わないことにし、売り場を後にする作者。「買はざりき」と強く言い止めたのは、心残りのようである。

細見綾子先生の句に（茄子苗を植えてくれよと旅に出づ）の句がある。掲句と句の内容は対照的であるが、日常生活の一齣を新鮮な発想で切り取り、平明にして余情の深い句風は、同じように思う。

(阿部 澄)

仲見世の裏や真昼の残る虫

自選句鑑賞に掲句を頂いたとき、浅草に行ってみようと思った。浅草には平成三十年の四月に「万象」の同人総会があった時以来訪れていなかったし、又この時の句会では小生の（花片の一つが仲見世裏通り）が、内海良太主宰選を頂いたこともあったからだ。コロナウイルス感染症の自粛ムードの中で一寸迷いはあったが、掲句の情景を掴むには一度は見なければと訪れた。

仲見世の裏手は思っていたよりも静かで、時折若い人たちの声上がる位だった。それに外国人観光客の姿はまばらだった。

この句、仲見世の表の賑わいと、それに対する裏の静寂の情景を、切字の「や」がその奥行きを深めており、真昼時に細々と鳴く虫の命の有りようを明確にしている。生きとし生ける物の命が表現されている。また生きていく事の感動が、仲見世の朱塗りの壁やこの通りの騒音などで、句作の実感を盛り立てていると感じた。

仲見世を過ぎた二天門の近くには、大きな公孫樹が第二次大戦で焼けてもなお、今も逞しい生命力を保って立っている。浅草神社の境内には川口松太郎の句碑があり、句碑には（生きるということむずかしき夜寒かな）と刻まれている。

(片桐帆一)

托鉢へ脚絆を緊める初時雨 せいぎ

住職と教員の二足の草鞋を履く多忙な生活の真っ只中に編んだ二十代から四十代までの作品一三二句を収めた『青春』の中の一句である。

この時期、多方面に活躍され、俳句の世界へ逃げ込むことは唯一の安らぎであったという。また、浄瑠璃にも熱心に通っていた。徳島の浄瑠璃と言えは有名な「阿波十郎兵衛」の「母子の別れ」を思い出す。お経で鍛えた声は浄瑠璃にはよく合う。子供の頃、徳島から「オイベツサンが舞い込んだ」と言って箱回しが来て箱から木偶を出した。それが怖くて隠れていた思い出がある。

福島氏は沢山の著書や句集を上梓され、地元では「たぬき和尚」のニックネームで檀信徒から慕われているようだ。掲句の托鉢僧となったのは何歳頃か、推察するに高野山大学に学んでいる頃ではなからうか。志を高く出発する朝の緊張感が「緊める」で百パーセント効果をあげている。

『続 福島せいぎ集』の後半で、へ仏弟子を迎へに京のはつしぐれを見る。迎えた弟子は骨と皮ばかりの幽霊が立っているようだったと語っている。作者は万福寺の住職であり「なる」との主宰。

(吉中愛子)

はけ水に萍の湧きはじめたり 恵子

句集「冬芽」、「薄氷」(昭和五十六年〜六十二年)の章の一句である。沢木欣一先生が平成十三年に亡くなられる直前に選をされ「一句一句が丁寧な詠まれ感覚が柔軟、素直な把握が対象を生かしている」と評されている。

掲句も「風」「万象」と受け継ぐ、命の写生がきっちり成されている。冬の間、枯死したようにじっとしていた萍がどこからか水面に現れ始める春、透き通った流れの中に見つけた命を「湧きはじめたり」と詠っている。

歳時記には「水草の中で萍だけが『萍生ひ初む』という季語を持っている」とある。生い初めた萍のみどりに感じた春の訪れ。その喜びは、はけ水の豊かな水の音と共に伝わってくる。

平成二十九年、私の所属する「初花俳句教室」は、細見綾子先生の『武蔵野歳時記』を一年間かけ勉強し、完読記念として初めて武蔵野を訪ねた。その折、内藤恵子さんが東京の同人の方々を誘ってくださり、綾子先生を偲びながら、谷保天神、野川を巡る吟行会を行った。

掲句の鑑賞依頼を受けた時、谷保天神の裾に湧くはけ水が真っ先に頭に浮かび、俳句の結ぶ縁というものを深く感じた。

(石川裕子)

「写生の源流を求めて」を読んで②

短歌から俳句へ 穂 刈 照 子

二月号の主宰による「写生の源流を求めて」を読んで、まず興味をひかれたのは、沢木欣一が夢中になり、写生の源流となったと書かれていた『斎藤茂吉ノオト』である。実際読んでみるとかなり難しい本ではあったが、写生に対する一貫した茂吉の強い思いは読み取ることができた。「実相観入に縁つて生を写す」という短歌写生の説のポイントとなる部分は、主宰の文章に分り易く書かれていて十分理解することができ、今回の主宰の文章は写生の本質を考えるよい契機となり、改めて写生の奥深さと大切さを感じる事ができた。この短歌写生の説が源流となり、欣一の俳句へと引き継がれた訳である。しかし写生が理解できて直ちに俳句になる訳ではない。短歌よりも言葉が少なく、季語等の縛りもある俳句では、言葉の取舍選択がとて大切になってくると思う。

八雲わけ大白鳥の行方かな

これは、最近ある句会で取り上げられた欣一の代表的な句である。句意は明確、圧倒的な写生の力が感じられる。終生「即物具象」の句作りを指導し、実践した欣一こそ、私達「万象」俳句に於ける写生の源流である。欣一の「俳句の基本」の一節「詩因を自分の目や耳で発見し、把握するのが写生である」といつてもよい。〈中略〉言葉はあくまでも単純・平明、的確を心掛けたい」をしっかりと心に留め、これからも俳句を学んでいきたい。

『斎藤茂吉ノオト』から「万象」へ 安岡みさき

内海良太主宰は、「写生」とか「即物具象」は俳句実作の目的ではなく、「実作の態度、方法としての写生、即物具象」と理解しておけばいいと述べている。又、沢木欣一は論よりも実作で範を示した俳人であり、論に縛られず、自由な感動や発想、表現に重きを置く俳人であった、とも。

実は、私の入門は「ホトトギス」系の俳誌からであった。主宰からも、先輩からも「客観写生」に徹するようにと指導された。未熟さもあつて「あなたの俳句は、先輩達の言うことを聞いているかも知らんが、つまらん」と他の結社の人によく言われた。当時は、写生に徹して作る「主観を入れない客観写生」の俳句が、私の目的となつていたと思う。

内海良太主宰はまた、中野重治の『斎藤茂吉ノオト』を紹介し、次のように書いている。

重治は、子規の写生はものを見て写すを超えて、「人間の恢復」を意味するものであり、さらにそれは明治期の実証的科學精神と結びついて「すべて事と物とをそのものに即して見、かつ測る精神」に基づいた「対象への肉薄」と位置づけた。

そして、沢木欣一の写生尊重の詩歌観の開眼はここからだったと記し、「風」から「万象」の写生の源流は『斎藤茂吉ノオト』からだつたと結論付けている。この流れを大切に、句作を続けていきたいと思つている。

秋晴の空気を写生せよといふ 沢木欣一

「風」から「万象」へ 芝宮留美子

『俳句の基本』の中に、句作の態度・方法としては何と
いっても写生が重要である。……詩因（感動）があつての写
生である……と書かれています。

「風」主宰沢木欣一先生は即物具象の写生を指導され、師系
を継承した「万象」では、滝沢伊代次初代主宰が創刊の辞に
おいて、作句は全て感動に発し、モノをとらえて、余情を尊
ぶ……と述べられ、即物写実をかかげられました。

内海良太主宰の「写生の源流を求めて」は、沢木先生が実
作を重ねて写生の重要性を「風」誌に語り、多くの方の影響を
受けて即物具象の写生を深められたことについて書かれてい
ます。さらに、「俳句実作の態度、方法として写生、即物具象
の理解」として、写生について「態度」・「方法」の考え方を
示しております。

写生の「態度」とは俳句実作の心がまえとあります。物そ
の物を素直に見て、物の有り様、状態を凝視し、物に心を集
中することと考えます。

写生の「方法」については、対象の実態や生命、本質を捉
えるため、対象に真摯に向き柔軟な心で接し、感動や発見を見
逃さない努力と詩因（感動）を的確に表現する言葉が大切
です。その言葉はやさしく、余情があるものを。

俳句実作の態度・方法としての写生は、一連の心持でと思
つております。

写生と余情 松井佐枝子

何度か読んでいる内に、滝沢伊代次元主宰が「万象」創刊
の辞で「作品は全て感動に発し、モノをとらえて、余情を尊
ぶ作風を確立したい」と述べられた中の、「余情」という言葉
が胸に響いてきた。

中山純子師が、句会の指導で「この句は広がりのある句で
すね」と言われたことと同様の意味ではないかと思つた。ま
た「びつたりと合う季語、言葉が見つかるまで待つのですよ、
そのうち見つかりますからね」とも言われた。

二月半ば、句友と小松の串茶屋遊女の墓を訪れたことがあ
つた。三十六基の遊女の墓がきちんと並び名と年齢が記され
ていたこと、幾人かは十代であつたこと、百合や菊などの供
花があちこちに供えられていたこと、雪が深く足が埋ま
つたことなど、鮮明に記憶が蘇る。

何年も、句に残したいと思うことしきり、ある時ふと浮か
んだのが次の一句。

吹きたまる雪は無垢なり遊女墓

ようやく思いがまとまつた感じがした。飛高先生の選評をい
ただき、読んでいるうちに熱いものが込み上げてきた。

沢木欣一先生の『俳句の基本』に「写生といつても日常生活
の断片をナマに報告することではない。詩因（感動）があ
つての写生であるというまでもなく、詩因を自分の目や
耳で発見し、把握するのが写生であるといつてよい」とある。
肝に銘じてゆきたい。

※第十八回万象俳句賞の締切り日を七月十日に延期しました。

「万象」新人賞速報

第十八回「万象」新人賞（令和二年度）が次の方に決まりました。

中鉢 弘 一（札幌）

万象俳句会

訃報

山本 麓潮氏（創刊同人・敦賀）は、入院加療中のごころ、令和二年五月三十一日、逝去されました。

享年 八十九。

謹んでご冥福を祈ります。

万象俳句会

万象基金のご報告（二口 二千元）

三澤 治子 五〇〇口

（令和二年5月27日・敬称略）

重ねてのご協力に感謝申し上げます。

ます。「万象」発展のため、大切にに使わせて頂きます。

万象俳句会

俳雑

第19回

【韓国人の俳句】 八木 忠栄

欧米で「ハイク」が、古くから盛んに作られてきたことは知られている。世界俳句協会もあつて、国際的に活発に活動している。フランスの有名な詩人ポール・エリュアールは、すでに百年前に俳句を作っていたし、アメリカのエズラ・パウンドも作っていた。

中国には漢俳協会がある。わが国には日本漢俳協会もあつて、さかんに漢俳をつくっている人を私は知っている。では、お隣の韓国ではどうか？

もう一度濃きルージュ引くコツセムチュイ

小さきもの重に語るときは母語

くちびるに花ひとひらや多弁恥ず

この三句は、韓国伝統舞踊家・金利恵さんの作品。金さんは東京生まれ。大学卒業後、伝統舞踊を求めて韓国へ渡り、ソウルに三十八年在住。私は金さんに会ったことはないし、韓国の俳句事情に詳しいわけではない。

「コツセムチュイ」は「花冷え」の意味。二句目、金さんは幼児期日本語で育ったが、韓国語こそ「母国語」。金さんは一月に、東京と名古屋で「俳舞」なるものを公演した。

（引用句は「中くらの友だち」6号から）

公益社団法人俳人協会

花 大 根 後藤桂子

石浜へ襦袢の如くに若布負ひ

刈り取る頃の「若布」は一・五がぐらいか、それ以上にはなっているのではないか。この句、漁師が束ねた「若布」を背負って引きずるように運んでいるのだろう。その様子を表す直喩の「襦袢の如く」が的確。

依代の櫛のさやぎや蛇出づる

「依代」とは、「広辞苑」によると「神霊が招き寄せられて乗り移るもの」とある。その「依代の櫛」の葉がさわさわ音を立てたと思つたら「蛇」が何処からか出てきた。「蛇出づ」は「蛇穴を出づ」の傍題だが、何か深みを感じる句。量り売りおまけに布株ひと掴み

エッセーによると作者は石川県の舳倉島に行ったとのこと。そこで若布を「量り売り」で買い「おまけ」を貰ったのだろう。こまかいところだが「ひと掴み」が写生。

七つ島 春夕 焼に影五つ

「七つ島」は舳倉島と輪島港の中間にある七つの島の総称。この句を作った場所は舳倉島か、帰りの船か解らないが、島が重なり影が五つに見えたのだろう。捉え方に意外性があつて印象的な景になった。

舳倉島の名前だけは知っていたが、今回の特作とエッセーに接して、機会があつたら行ってみたいと思うようになった。

春 の 子 三屋英俊

おはじきを弾く指先春を待つ

「春を待つ」は冬の季語。外は寒いこともあつて、子供は家の中で「おはじき」をしている。勿論、子供は無心で遊んでいるのだが、そのぱしっと動く「指先」に作者は自身の「春を待つ」思いを重ねたのだろう。

初蝶のふはふは色のある方へ

この句の景は難しい。闇でなければ「色」は必ずある。そうすると、この「初蝶」は闇(日陰)から光(日向)へということか、単に赤や黄の原色のある方へということか、それとも何かの花を「色」と表現したのか。「ふはふは」は無くてよい言葉なので、ちょっと視点を交え周りの景とどうか状況を見えるようにすれば面白い句になるのでは。

次々に飛び出す空や石鹼玉

まん丸の「石鹼玉」を「空」と言つたところが良い。勿論、「空」は映っていたのだろうが、それを言うと言明くさくなり、「飛び出す」が生きなくなる。俳句は時に省略も必要。

遠ざかる声やぶらんこ揺れ残る

下五の「揺れ残る」で「遠ざかる声」がどういふものか解つて景が浮かんでくる。

エッセーに「弟の孫の相手をして、句を貰う」とあり、そのためか句に甘さはあるが、明るく幸せそうなところは良い。

同人作品評（五月号）

成瀬真紀子

音高く暗渠に速し春の水 内海保子

春の雪解けが始まると、川や池などの水も増えてきます。「春の水」のまぶしさと美しさを称えます。同時に「音高く暗渠」に勢いよく流れ込む様子に自然への畏敬の念を感じます。写生を季語がしっかりと受け止めています。

エプロンを黄の花柄に春立つ日 松原智津子

桶一つ白菜漬けて一日果つ 内田郁代

まだまだ厳しい寒さの中、ようやく立春を迎えた喜びを「エプロンの黄の花柄」に託しました。「私は黄色い花を見ると何だかしあわせそうに思う」という細見綾子先生の言葉を思い出します。黄の花柄のエプロンが翻り春を呼びます。

上五と下五の「一つ」「果つ」が脚韻を踏み、「一つ」と「一日」も呼応してとてもリズムの良い句となりました。桶でじっくり漬けた白菜は発酵が進み甘くて美味しさも格別です。作者のひと仕事終えた安堵と喜びが伝わります。

「ハイ」と手を挙げてゐるかに杉菜の子 加藤季代

やはらかな夕日へ鬼を遣らひけり 古川京子

土筆の事を詠んだ句と思います。「ハイ」と手を挙げてゐるかに」と捉えた独自の発想がとて面白く思います。この句を読んでから土筆を見ると、なるほどと納得いたします。素直に詠み温かい句となりました。

鬼遣らいの情景ははつきり分かりませんが、鬼を「やはらかな夕日」まで追い払ったと取りました。追い払ったのは神社の庭の隅だったかもしれないが、その時「夕日」が差していたのでしよう。作者は場所を詳しく言わず「やはらかな夕日へ」と表現。切り口の新しさが光ります。

畦焼の炎先にゆらぐ六地藏 澤 照枝

春雨や池に影おく金閣寺 降幡加代子

作者のお住まいの茨城県土浦市には沢山のお寺があり、お寺の入口や墓地の入口、弁天池の近くや集落のはずれなど二、十四箇所も六地藏が並べられているそうです。掲句の六地藏は「畦焼の炎先にゆらぐ」ほど田の近くに立っているようです。生活の中に六地藏信仰が根付く土地柄を感じます。

「池に影おく金閣寺」は類句が有りますが、季語「春雨」の選択が成功しました。「影おく」から春雨のとても静かに小止みなく降る様子が想像出来ます。歴史的情緒を内に持つ季語「春雨」と金閣寺が釣り合い堂々とした句です。

富士遠峰霞みしまに暮れにけり 久留島規子

お住まいの東京の御自宅近くから「富士の遠峰」を眺めることが出来るのでしょうか。朝から霞が掛った富士山が見えたのと同じ情景のまま夕暮れを迎えたようです。そんな富士山を作者は「あら？」と気付き句になさいました。日常の中の小さな変化に気付き句に仕立てる力を感じます。

早春のかをりやはらか雨上る 杉浦一子

雨が上がった時の「早春のかをり」とはどのような香りでしょうか。作者は嗅覚を研ぎ澄ませ「やはらか」と把握しました。独自の感覚的な表現ですが共感できます。語順も良く、中七の後の軽い切れがすっきりとしたリズムを産みました。

閉館の雨戸練る音春夕焼 大橋雅子

旧伊藤博文金沢別邸と前書きがあります。この別邸は伊藤博文により明治三十一年に建てられた茅葺奇棟屋根の田舎風海浜別荘建築。老朽化が激しかったので平成十九年に解体・復元工事を始め、平成二十一年に創建時の姿に甦ったそうです。閉館時間となり雨戸が閉められていきます。その音に當時を偲んでおられます。すべてを包む「春夕焼」が効果的に詩情溢れる句となりました。

一日をたつぷり使ひ蟻の道 佐藤和子

水底に筋をつけて這う蟻。そのゆつくりとした歩みを「一

日をたつぷり使ひ」と表現されました。作者はじつと観察して蟻になりきっています。この観察力を見習いたいと思います。写生を超えた表現に惹かれます。

菜の花忌中東へ発つ護衛艦 岩崎武士

「菜の花忌」は司馬遼太郎の忌日（二月十二日）。司馬遼太郎は『竜馬がゆく』や『街道をゆく』などで有名な歴史小説家です。掲句の中七下五が日露戦争勝利に至るまでの勃興期の明治日本を描いた『坂の上の雲』を彷彿とさせます。もちろん戦争に行くのではありませんが、情景と季語がびつたりはまり揺るぎない句となりました。

獅子舞や土間の五疊を舞台とし 望月敏男

この句は「土間の五疊」と具体的に表現したことで成功しました。獅子舞が家々を回ります。この家は「土間の五疊」が「舞台」です。昔の商家の通し土間を想像しました。所狭しと躍動する獅子舞の姿が浮かびます。

冬深し父の漢詩を読み返す 塩井志津

漢詩を作られるお父さんは先生だったのででしょうか。作者は「漢詩を読み返」しています。季語が極まった寒さを伝えます。景色も心も冬一色。漢詩の内容を示唆しているのかも知れません。作者の心はお父さんが漢詩を作った頃に帰り、お父さんを偲んでおられます。想像が膨らみしみじみとした余情を感じます。

三 島 曆

望 月 敏 男 (静岡)



若 鮎 の 銀 の 光 の 走 り け り
武 者 窓 て ふ 北 窓 開 く 姫 路 城
土 間 に 掛 く る 三 島 曆 に 春 月 夜
豆 腐 屋 の 唼 叭 遠 く に 荷 風 の 忌
惜 春 の 三 島 曆 の 版 木 可 可
筍 て ふ 砲 弾 担 ぎ 凱 旋 す
ま た 何 か 衝 へ て 行 き ぬ 夏 燕
倒 し た る 樟 の 切 株 夏 匂 ふ

春 夕 焼

河 野 尚 子 (金沢)



春 天 に 罅 拡 げ て 城 普 請
梅 東 風 の す る り と 鉄 砲 狭 間 抜 け
雪 吊 解 き 積 ま る る 縄 の 蝮 局 め く
木 の 芽 風 利 家 像 を 撫 で ゆ け り
紋 白 蝶 は ら り と 超 ゆ る 城 櫓
春 風 に ア カ ペ ラ の 声 城 渡 る
囀 り や 城 の 鬼 門 に 楠 一 樹
春 夕 焼 城 下 の 彼 方 海 光 る

万象招待席評（四月号〜六月号）

谷 渡 末 枝

寒 牡 丹 宮 本 加 津 代

「万象招待席」の作者をより知るべく、プロフィールや、これまで作品を出るだけ読むようにしている。

几帳面な暮しぶりが、句の端々から読み取れる。

篝火の火の粉が除夜の星となる

目で追っていった景で、一読して状況が鮮明に浮かぶ。

けれども何か物足りない。始めから終りまでずらずらずらと繋がっていて、最後に「星となる」と強く言い切り、成功したように見えるが、読者の心を掴む言葉がほしかった。

俳句に於ける「切れ」と「韻」を最大限に活用したならばスケールの大きな、さらに奥の深い句になると思う。

作者の豊かな知識と経験がこれからの句にも活かされていくことを楽しみにしている。

石 蓀 の 花 長 谷 川 信 也

香煙のたゆたふ暮の泉岳寺

個人的には、神社仏閣の句はあまり興味がありません。

ところが、なんと掲句には目が釘付けになりました。

季語の扱い方はシンプルだが、元禄十五年十二月十四日の出来事を繙けば、名刹「泉岳寺」には「暮」以外の季語は見当たらないと思う。簡潔な仕上がりが、読み手の心を強く掴み「香煙」とともに歴史の中へ誘っていく。

ただ「暮」の一字では「日の暮」などの天象にもとれて時候の「年の暮」や「年末」を言い表すには、句材によつては乱暴な使い方になりかねない。

くどいようだが、「泉岳寺」だから許される季語で、仮に「暮の浅草寺」としたらどうだろう。「暮」の季語が曖昧になり観光俳句の類にとどまってしまう。

他にも触れたい句があつたが、一句になつてしまった。機会があつたら又作者の句を鑑賞したい。

平 和 観 音 島 田 和 枝

芍薬の赤き芽土をうすく被て

初夏に花開く芍薬は、まだ寒さの残る庭先などに、よく見ると赤いマニキュアを塗った爪のように、凛とした芽を覗かせている。「赤き芽」は冬を乗り越えた力強さの現れだ。

作者の発見は「土をうすく被て」と優しく捉えている。

大 藤 の 剪 定 あ さ の 静 け さ に

何かの記念や節目に植えたのかも知れない「藤」は、毎年丁寧に「剪定」されて、家族と歴史を共にしてきた。

「大藤」の「剪定」に、人生の後半を穏やかに過ぐす夫婦の様子が垣間見える。

ただ、「あさ」という時間限定であるならば、漢字で「朝」としたほうが「静けさ」に、より透明感が加わるのでは。

父島の大鰻 大 林 彬 彦

客待ちの驢馬のまたたき春の雪

「春の雪」という意外な取合せが、旅の解放感を表しており、「客待ちの」「驢馬の」「春の」と畳みかける「の」の字のリズムの良さに、驢馬への親しみが伝わってくる。

驢馬に跨って、ゆったりと春の島巡りも悪くない。

勝独楽のよろめきながらたふれけり

春雷のつまらなさうに鳴りにけり

八句中同じテクニクの句が二句。どちらも中七に主観的表現を使ったがゆえに季語の鮮度、季語の魅力が充分に活かされずに終わって残念。

世界自然遺産に登録されている小笠原諸島、父島への交通手段は東京から片道二十四時間の船路で、然も週一便とか。

一連の作品は、敢えて吟行地名を抑え、身近な句材に的を絞って素直に詠んでいる。

蜂須賀桜 平 田 功

どんな辺鄙な田舎であろうが、大都會であろうが、日本の

津々浦々に桜の木があつて、人々は開花宣言から散るに至るまでを、三分だ五分だ八分咲きだと言つて、開花状況に浮かれ楽しみ、そして散るのを愛で惜しむ。日本人のDNAには、桜に対する想いがしっかりと組み込まれているのだ。

五分咲きもすでに花見の賑はへり

花の見頃を待ちきれずに来てみたら、もう先客で賑わつていた、なんてことがよくある。「五分咲き」が実感。

俳誌「なると」で研鑽を積み、風土に添つた詠み振りには嫌みがない。温厚篤実な人柄で理系から文系にも関心を寄せているという作者に、一度お会いしてみたい。

サハラ砂漠 津 金 房 子

世界最大のサハラ砂漠、作者はどんな旅をしたのだろうか。広大な、「サハラ砂漠」をイメージして全句を読んだ時に、「春星」「春日」「春の朝」「春耕」「春夕日」などの季語は、一句の中にどんな働きをしているのか考えさせられる。

豊富な句材に五感で挑んだならば他に季語も有るのでは。

薔薇芽吹くアラブの古き神学校

薔薇の歴史は古く紀元前からあり、今も世界中で花の女王として愛されている。花言葉は「愛・純潔」。色によつては「嫉妬」というのもある。「神学校」と「薔薇」の結び付きに、わけもなく興味が湧いた。

石象ノオト

テーマ「海」



ウニの味

三鷹 南場雅子

私にとつて「海」といえば、北海道日高の海辺です。

海のない札幌から、小学生だった私は夏休みになると待つてましたとばかりに弟と遊びに行きました。父方の祖母やいとこ達に会うのが楽しみでした。途中汽車の窓から見える広い砂浜には、長い昆布がずらりと干してありました。今はよく知られる日高昆布です。祖母の家に着くと早速近くの岸壁へ。そこではいとこ達が海へポンポンと飛び込んでいるのです。泳げない私はただ見ているだけでしたが、暫く待つていると、みんなの手にはウニが。それを石で割つてみんなでたべるのでした。

ウニが食べた昆布もいつしよに。

これが、私にとつて忘れられない味となりました。今では遠く懐かしい海のうらの日高の海です。

海と山

東京 北口富栄

「海と山どつちが好き？」と聞かれると、海と答えていました。山と田んぼに囲まれて育つたので、ひろい海が好きでした。「かなづち」ですが、子供達が成長するにつれ一緒に海へ行くことも無くなり、低山ハイキングが趣味となり、鳥の声を聞きながらひたすら天辺をめざして歩くのもいいなあと思つたりもしました。今は膝が悪く歩いていませんが、その内高尾山へ又行きたいなあと思つています。

話は逸れましたが、3・11の震災の後の離岸流で友人の姪御さんがふるりの千里浜の海で亡くなられたと聞いた時、ただ驚き言葉が出ませんでした。帰省して海浜道路を通る時、楽しくかつた海の思い出と、その事を想うと心

が痛み、海をじいつと見つめふる里を後にします。

海

那覇 砂川道子

突然の転勤命令でした。長距離を下手くそな車の運転、慣れない職場環境での緊張の連続、健康診断では、ついに、貧血要治療を言い渡されました。

そのような中、救いの神現るです。帰り道半ば頃にある家具屋さんは海を百八十度見渡せるビル。何度、寄り道したことでしよう。コバルトブルーの海、水平線、潮風、砂浜、ウインドサーフィンの人を見ながら店内をぶらぶら。それまで那覇に育ち、生活も那覇中心の私は、海に行くのは数える程だった。もちろん金槌。潮風に吹かれ、その香りに身を置き、ストレスが緩むようでした。

五年後、自宅近くの職場に戻り、貧血も嘘のように全快。

今でも、時々、夢にまであの時の海が出てきます。

初めての海

横浜 小坂橋泰山

物心がついて初めて海を見、体験したのは茨城県の大洗海岸である。

六十年前、幼稚園の年長組の夏。父が勤務していた高校の教員家族三十人が参加した一泊二日の海水浴。朝、高崎を小型バスで出発、バスガイドと童謡を歌う楽しい車中だった。

海水は本当にしょっぱい、体が浮き易い、波の引く力が強いこと。海なし県の生れの私には、海の印象は強烈だった。

小学校入学後は、新潟の柏崎や伊豆の弓ヶ浜などに海水浴へ行つた。

結婚後は横浜に住み、海を眺めることと自体が心地良く、月に一度くらいは横浜や湘南方面の海へ足を伸ばしている。

佐渡の海の四季

調布 大林彬彦

大佐渡は北田野浦の海辺、岩場が多く磯釣に最適、三歳より十年間親しんだ。魚はあぶらめ、黒鯛、べら等が釣

れ全て大切なおかず。春は磯菜の味噌汁が香り最高。海藻類はみな旨い。

素裸の寄居虫歩く屈の磯

北端の外海府は魚介類の宝庫。特に栄螺と鮑。二ツ亀は正に佐渡のまほろば。浄土の浜の絶景。遊泳と岩壁登り。

打ちて引く波に踊るや空鮑

秋は一夜干の烏賊の肉厚の柔らかい旨さ。塩焼は勿論、刺身の秋刀魚や鰯が美味。

日は海に鳥は晴に秋夕焼

シベリア寒波の冬は願集落の大野亀が勇壮。ダウンドカンとぶつかる怒涛を胸張って弾き返す巨大な力士のように逞しい。舌鼓を打つには河豚鍋と海鼠だ。

願願に青筋たてて海鼠噛む

浜甲子園の海

千葉 喜多恭仁子

私が育つた兵庫県西宮市浜甲子園は、閑静な昔の別荘地でした。

家から歩いて五く六分も行くと、神戸と大阪に挟まれた白砂・青松の美し

い海が広がり、夏には水着のまま出かけ、遠く六甲山を眺めながら泳ぎ、授業もこの海で平泳ぎを教わりました。

昭和三十四年九月、伊勢湾台風が上陸、我が家も床下浸水に！

その後、堤防が嵩上げされ、テトラポットが置かれ、遊泳禁止となりましたが、白い砂浜はそのままに、帰省の度に、娘や孫達と磯遊びを楽しみました。

七年前に父が亡くなり、母を千葉へ引取り、実家を手放しました。浜甲子園を去る最後の日、ゆつくりと海まで歩き、別れを惜しんで来ました。

梅古木残して実家手放しぬ
何故か海の句は一句も無いのです。

「万象ノオト」投稿募集

▽11月号「櫛」 (7月末日締切)

▽12月号「つば」 (8月末日締切)

▽長さ 本文 17字×19行以内

〒194-0041 東京都町田市玉川学園

3-10-19 桔梗 純

埼玉

金子兜太（その三）

山口素基

金子親子の産土・秩父の足跡

伊昔紅・兜太という二人の偉大な俳人を生んだ皆野町そして秩父郡のゆかりの地には、兜太の句碑が数多く建てられている。それぞれの句碑は、二人の大きな足跡を後世に残したという市民の悲願によって建立されたものである。

句碑は伊昔紅・兜太ゆかりの場所や、皆野町の名所・旧跡に立てられ、これらの「句碑巡り」は、二人の句を楽しむとともに、「産土」の地を巡る観光名所ともなっている。そして平成三十年十二月に、生家である皆野町の「壺春堂金子医院」の庭にも句碑が建立された。刻まれた句は「おおかみを龍神と呼ぶ山の民」で、秩父三峰神社はオオカミを信仰の対象としている。金子兜太は秩父を想うとき、現在は絶滅してしまったとされるニホンオオカミが浮かんでくるという。

四季折々の姿を見せる、秩父の風景とともに兜太の句碑を巡ることで、「産土」に思いを馳せ、心を置いていた兜太の原点を感じることができる。

おおかみに螢が一つ付いていた 兜太（椋神社）

よく眠る夢の枯野が青むまで 兜太（ヤマブ味噌蔵）

谷間谷間に満作が咲く荒凡夫 兜太（宝登山神社）

夏の山国母いて我を与太という 兜太（円明寺）
 山峡に沢蟹の華微かなり 兜太（萬福寺）
 裏口に線路が見える蚕飼かな 兜太（個人宅）
 日の夕べ天空を去る一狐かな 兜太（天空の里・立沢）
 僧といて柿の実と白鳥の話 兜太（圓福寺）
 萩野吟子の生命とありぬ冬の利根 兜太（萩野吟子記念館）
 たつぷりと鳴くやつもいる夕ひぐらし 兜太（常光院）
 白梅に風雨の日日の澄みにけり 兜太（龍泉寺）
 質実の窓若き日の夏木立 兜太（熊谷高校）
 利根川と荒川の間雷遊ぶ 兜太（中央公園）
 草莽の臣友山に春筑波嶺 兜太（根岸家）
 行雲流水螢訪なう文殊の地 兜太（文珠寺）
 金子兜太氏は、「万象」の師系にあたる「風」の創刊同人の一人で、妻の皆子氏は、第一回「風賞」を受賞されている。また、平成十八年十月二十一日（土）に東京・高輪プリンスホテルで開催された創刊五周年「万象」全国俳句大会にて特別講演の講師をお引き受けくださり、「『風』のむかし」と題して懐かしくも貴重なお話をしてくださいました。兜太俳句の最終章となった、句集『百年』の帯には「俺は死なない。この世を去っても、俳句となつて生き続ける」とある。（完）



俳書探訪

曾根 満

「俳壇」(四月号)を読んで

今回は、「俳壇時評」池田澄子がいる(坪内稔典)と巻頭エッセイ「AI一茶君に思う」(福神規子)を取り上げます。その理由は、期せずして俳句の未来を問うていたからです。

先ず、坪内氏は「俳壇には三つの巨大な協会があるが、相互に対立しているときは、意義があった。対立は俳句の多様性の主張だったし、対立を通して今までになかった俳句が出現する可能性があった。でも、今では協会に対立がなくなっている。しかも高齢化している」として、「俳句は今、命が尽きようとしていると。また「俳壇」から「新しい俳句が出現することは不可能である」と断じています。

坪内氏の厳しい指摘は、「毎日俳壇賞」(二〇一九)の作品に及び、俳句らしい上手く出来た句が選ばれているとして

地球への片道切符流れ星
魚籠下げて竿を畳めば河鹿鳴く
入学の子に東京を案内され
カフェらしき内装工事春近し

を示し、「このような句が一年間の最優秀句だとあってはなんだかがっかりだが、世間の俳句は要するにこの程度なのだ」と評しています。そして「では、この程度でないものが

あるか。ある。たとえば次の池田澄子の句である」として

じゃんけんで負けて蛭に生れたの
生きるの大好き冬のはじめが春に似て
冬の虹あなたを好きな人が好き
ピーマン切つて中を明るくしてあげた

(以上句集「空の庭」一九八八)

を挙げ、「このような句はブレバトや俳句甲子園には現れないし、まして新聞俳壇の最優秀賞を得ることもないだろう」と。そして、池田澄子俳句の佳さを「生活文化としての俳句は俳句の基盤のようなものだが、そこをちよつと離れて、たとえば池田澄子の俳句がある。かつて今も、ときどき池田澄子的な俳人が現れて、俳句は命を繋いできた。さて、今度はだれが現れるのか。」と結んでいます。

福神氏のエッセイは、AI(人工知能)がいくら進化して巧みな俳句ができたとしても、感情・感動を味わうことができるか。そして、「自分の述べたいものに季語を添えるのではなく、季語の揺るがない世界、そんな世界をめざして詩心を育んでゆきたい」と結んでいます。この詩心をAI俳句は可能にするのでしょうか。可能にしたら坪内氏の期待する「発想も文体も独自の俳句」の登場となるのでしょうか。そのとき「AI俳句」に対して「人間の俳句」はどこへ向かうのか興味津々の二文でした。

(筆者住所 〒422-8042 静岡県駿河区石田二一九一五)

砂^{すな}地^じ宏^{ひろ}子^こ
(武蔵野)

巻頭作家(六月号)プロフィール



砂地宏子さんは昭和28年、東京世田谷生れ。お祖母さま、ご両親、弟さんに囲まれた少女時代を送った。

中学高校は、東京大学教育学部付属中学・高等学校。文学少女で乱読の日々を送った。クリスティーの推理小説を片端から、家に揃えてもらった日本文学全集を手当たり次第にと言う。立教大学文学部日本文学科に進み、卒論は「北杜夫の初期作品について(『幽霊』)までの軌跡」。

大学を卒業した昭和51年に千代田区にある女子の伝統校・大妻中学高等学校に国語科専任教諭として着任。筆者とのご縁もここで始まった。熱心な教科指導に定評があっただけでなく中学

の学年主任、生徒指導部主任などでは常に生徒の立場を尊重し、節度あるなかに思いやりのある態度で子供たちに接する姿が印象的だった。

定年退職後も請われて特別非常勤講師として勤務し、平成31年3月に教職を去った。現在は母上の介護、俳句実作に加えて、朗読の勉強を続けている。

歌舞伎や文楽についての造詣も深い。平成26年に、飛高隆夫先生が指導されている大妻コタカ記念会生涯学習講習会「俳句」に参加。平成28年、周囲の勧めもあり「万象」に入会。その年の「万象」六月号に三句が初掲載。

子らの手に掘り出された蛙かな
雑踏に水仙の香や女過ぐ

切株に去年の桜を見てをりぬ
永年の国語教師としての知識の蓄積があり、俳句の形や言葉の選び方には初心者と思わせないものがあった。

俳句を始めた頃は忙しい勤務の他に

ご両親の介護があり、その後に頼りにもしていた弟さんを失うという痛恨事があったが、そうした中で独自の句境を手にしていったようだ。

夕闇の塊一つ 蕨
青嵐一ト日敦を読み耽る
靴からはみだす赤や母の柿

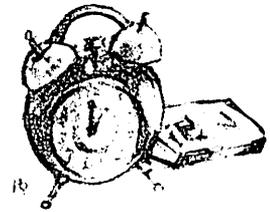
「万象」入会後は浦和句会に参加し、中央句会にも積極的に出席し、俳句への意欲を増しながら現在に至っている。昨年二月からの一年間に、四句入選四回を経て、今回巻頭に。

砂地さんの場合には、国語教育の中で数多くの俳句を見て来たので、それが「万象」の提唱する即物具象の俳句に近づくための障りになっていることがあるかもしれない。今後は写生に徹した俳句を楽しんでいただくとともに、有為な能力を「万象」の発展に役立てていただけるものと期待している。

(中村千久)

万象作品

飛高隆夫選



托鉢の錫杖の音花菜道 東京 草間三香子

洞深き銀杏大樹の芽吹きたり

小流れの木橋の下に蝌蚪生まる

卒塔婆を担ぐ青年桜東風

がうな歩む身の丈に合ふ暮しかな 那覇 謝花寛營

梯梧散る礼拝堂の静けさに

拭きなほす臍の眼鏡イザヤの書

引きずれる抜歯のうづき春の闇

卒園や磨けばみんな光る子に 松田 古谷悠紀子

堰三段帯解かれたる春の川

小流れにクレソンの青盛上る

初燕校庭三たび旋回す

囀や信号を待つ盲導犬 横浜 小板橋泰山

切抜きのレシピ並べる日永かな

花辛夷鳩の生まるる飴細工

風光る骨董市の江戸切子 武蔵野 砂地宏子

何もかも覆ひて咲ける桜かな

さざ波のほのかに紅し桜蕊

上りきて桜若葉や上野山

うららかや雲から雲へ飛行船

コロナ禍や閉ぢ籠もりみて花は葉に 茅ヶ崎 久保田富士子

名を呼べばにやあと返事の朧月

花の雲夫と出会ひし紀三井寺

初音かな朝の川面をすべると

吊橋の引き合ひ止めて山笑ふ 調布 大林彬彦

ペンギンの皇帝の歩や風光る

若駒の尻に乗せゐる鳥かな

国語より英語大事や四月馬鹿

架橋工事じつと見守る葱坊主 徳島 平岡 功

芳香の闇深めたる沈丁花

菜の花の幾何学模様千枚田

春暁を待てず黄泉へと兄星に

花の昼和菓子職人手を休め 大阪 入山繁幸

燕来るここが我が家と去年の巢に

風光る子の体型は少年に

両岸は枝垂桜の長瀑布 船橋 内田節子

雛飾るかくし様ななき手の齢

永き日や煎餅ひらひら焼かれをり

真青なる空の居心地揚雲雀
うごくとは見えず寄り添ふ春の雲

雪残る十勝連峰巖深し 札幌 北浦詩子

カッコーと鴉の真似る春の昼

うららかや山毛櫨の幹より水吸ふ音

片栗や雄蕊露はに虫を呼ぶ 佐々木 茂

新生の雄叫び高し雪解川

雪割つてここに我在り露の臺

ふらここでゴンドラの唄真似る宵 島崎 洋

恋猫に不要不急を問うてみる

名乗り出る庭の木の芽の数かぞへ 園田鶴子

流水の去りたる漁港船並ぶ

夕されば壺焼き匂ふ港町

春の蟻やがて巢穴へ戻りけり 高山哲英

発電所の灯の煌々と花の闇

翔ぶ鳥の影にも力牧開く

払ひきれぬ柳絮をつけて巡礼来 竹重富子

夕されば閉ぢて紛るるクロッカス

ふきのたう小さな露の葉も見えて

椿展花よりも名のうるはしく 中鉢弘一

春空に生絹の雲の消えゆける
沢水のせせらぐところ露の臺

通し鴨薄氷解ほくるる沼の面に

かくれんぼまだ見つからぬ春の暮ハル藤原善明

初乗りの銀輪のベル春きざす

教科書の匂ひ懐かし四月かな

幾光年空群青に春北斗
八代洋子

たあいなき夢に疲れし春の朝

すみれ濃し空家の軒は猫の道

海明けを告ぐる幻氷オホーツク
吉田克己

北大のポプラ大樹の芽吹きかな

湖面なぎ逆さ樽前山風光る
江別 太田佳美

植ゑ込みの董の手入れ銀行員

旅の果て最終便の春満月

古希祝ひ八丈島のフリージア
新庄 曾野部礼子

羽子板の見得きる白眼歌右衛門

向き合はねど女雛男雛の笑み湛へ

山桜鳥来て騒ぐ奥の院
東根 門脇好子

独り居に届く炊きたて五加木飯

亡き母の御詠歌本や春深し

初蝶の揺らぎ翔ちたる石舞台
新潟 齋藤 信

調律の鞆重たき木の芽風

春彼岸また一軒の墓じまひ
新潟 齋藤ヨシ

二月尽コロナウイルス先よめず

夕厨窓叩き去る春霰

寄せ植ゑの春の草花明りかな
榊原キヨ子

刻むより千切る齒ざはり春キャベツ

山麓に雪のちらつく春彼岸

ものの芽の少しほころぶ日差かな
佐藤幸示

初蝶の兵士の墓を翔け舞ひぬ

昏れ残るベンチの隅の花の屑
佐藤シズエ

コーヒーの香の満つ窓の花明り

お遍路にまじり差し出す朱印帖

花冷えや友より届く麦粉菓子

新築に和室一と間や春障子
中塚滋子

出ついでに野暮用ひとつ日の永き

張りつめし空ふとゆるみ春の雪

弥彦嶺の裾野春耕待つ気配
渡辺志ま

うららかや人こはがらぬ土鳩の歩

永き日やジャムのラベルに花描き
燕

魚籠重く春夕焼に竿納む 宇都宮 福田 弘

芦の芽の薄泥払ふ鯉の鱮

寒晒し蕎麦の幟に峡の風
菜の花の土手を離るる渡船かな 佐野 売野 緑

春雪や不可思議さうな赤子の眼

翁道追ひつ追はれつ初音かな

春うらら車椅子押す老紳士 芳賀 北井茂子

つんつんと菖蒲芽を出す小川かな
新しき売地の看板黄水仙
金子恵子

夢叶ふ花満開の新居かな

遊歩道右も左も二輪草

花柄の農婦の帽子風光る

一叢の一人静に薄日さす

菫植うる百円店のシャベルにて 小林元子

ぺんぺん草振ればかすかな音したり

鉄塔の脚の踏ん張り春風

大ききも塩梅もよし桜餅
黒川しげ子

搾乳の手元に桜吹雪かな

初つばめパンの香りの道の駅

一面に蒲公英群るる更地かな 塙 テル

茂林寺の陶狸の見上ぐる花吹雪

齋藤ミチ子

彼岸入り幼児の真似る正座かな

黒雲の迫りて来るや桃の花

菜の花の左右に揺るる通学路

渡良瀬川の堤走る子花菜風

廃校の尊徳像へ飛花落花 福武幸子

大藤の小枝に花芽粒つぶと
関口かつ子

草萌の香へ園児等は車座に

菜の花や二頭の牛の尾を振れる

夜更けまでコロナコロナと亀鳴けり

薄鶯の草の間に間に董濃し

高田貴子

根方へとまるく掃き寄す落椿 飯塚キミ

青鰻やおかんの店の軒低し

菜の花や漆喰蔵の浅き罅

まんさくや桜峠といふ古道

春の夜半地震に鳴きたる猫宥め

紅枝垂お地藏山に祖父の墓

高田貴子

右ひだり首忙しなき雀の子 佐野 飯塚満里子

対岸を野焼の焰遊水地

高田貴子

山椿沢に光れる金雲母

対岸を野焼の焰遊水地

高田貴子

下野や空に富士見る彼岸道

花見茶屋鯉の甘露煮まだ温き

朝日さす青麦の穂のあづき色

てかてかと畦を塗り上げ夕日中

鶉鳴くや桜の蕊の赤あかと

カメラマンの赤きスカート木の芽風

川流る左右の菜花に狭められ

花吹雪教室の窓開け放つ

堂々と猿出づる里山笑ふ

木瓜の花代はるがはるに鳥突く

春満月木の間のくもの囀くつきりと

孕鹿うるむ目をして笹食めり

桃咲いて男体山いまだ雪被る

散る桜寝釈迦の衣白白と

春満月天地を分つ三龜山

春蘭や小檜林に鳥の声

検診へ足取り重し養花天

空襲にまつはる雛の話かな

雪吊の縄飛ぶ空の広さかな

雷よ来い早の村のささら舞

佐野店網洋子

仲山さよ子

菰原美穂子

松田富夫

義本美智江

古河青木正男

大粒も小粒もありぬ春の雪

中日に生れし吾が名は陽子かな

囀りの小鳥のありか目で追へり

春耕の白き軍手の清々し

秩父路にももの芽青く匂ひたる

新緑の光散らして深呼吸吸

湯上がりへの幸せつなぐ春の雪

土手の下のびる取り取りウオーキング

たんぽぽの石の割れめに花咲かせ

入間野の雉の初啼き聞く朝

校庭の桜散り込む潦

人も犬も桜吹雪の中にある

花の塵渦巻きながら地を走る

梅若葉一夜の雨に華やげり

雨音を聞きつつ覚めぬ春の夢

帰郷して春光の真ん中にある

春雷や木の根草の根からみ合ふ

ひと回り大きくなりて山笑ふ

マスクして読経の声のくぐもりぬ

春の雪外出自粛の東京に

川越岡野輝子

黒木敬子

津金房子

山本敦子

千葉大月玲子

喜多恭仁子

蔦芽吹く閉ぢたるままの甲子園

会合の日延べしままや蠶ぐもり下集 高田みや子

永き日の白山蒼く暮れにけり

墨堤にマツク喰らひて荷風の忌

幹を打つ音の響きや桜守

家々の末代へ継ぐ桜かな

囀や雑木林に耳澄ます

春嵐壁にピカソの泣く女

美術館桜花散る休館日

久方に肩寄せ合へば桜まじ

休校の子に本を貸す春の雪

花の塵重なり合ひし藻屑蟹酒々井

新しき声して庭の巢組かな

春風や沖ゆく船のけぶり逆佐々

黙々と草取る畝の花の塵

用水の流れれそうそう田の蛙

ふるさとは限界部落落の葦

謙信の攻めし城跡谷若葉

風信子朝一番の美容室

杉田富美代

黒塗りの社殿見上げて杉の花

日の当たる土手は土筆の国となる

青き踏む駆ける少女のしなふ脚佐々

現世はみな陽炎のなかのこと

鳥獣の中に吾ゐる涅槃絵図

啓蟄やまだ覚めきらぬ土ふまず

悩むのは明日にすると桜餅

誰ともなししりとりゲーム春炬燵

若き葉に埋れ女が露を刈る

来年の宴を待てと春の逝く

外出を自粛する間の飛花落花

井戸端の敷石の間すみれ草

梅の香やいにしへ語る子規の句碑

雨上がり一夜に伸びし土筆かな

時の鐘竹の子御飯届きたり

遠筑波眺め足もとの蕨つむ

冬薔薇の刺に傷つき指含む

白木蓮の並木の上の空真青習志野

春光の空へ雉鳩はばたけり

清水礼子

鈴木隆久

鈴木美根子

竹内 実

立原千代子

米田敏子

春シヨールシヨウインドウに顔映す 船橋 入河 大

啓蟄や感染防止呼びかけて

かたくなに真つすぐな線路草萌ゆる

入社式延期となりぬ雲の影

言ひ放ち憂さ晴らしたる四月馬鹿

病院へ行かずじまひの春の風邪

みどりごの手首の二重桃の花

ゆくりなく玻璃の向うに初蝶来

落椿正座し紅を極めけり

春運ぶ風に背中を押されたり

空を見て春の訪れ探しけり

花誘ふ風に桜は雪となる

一面がまたいちめん花菜風 柏

吾の指にぎりし赤子桃の花

問診の医師の目を追ふ春嵐

行き先を風に尋ねて犬ふぐり

記念樹の子等は二十歳に桃の花

池に向く直哉の書斎浅き春

掛地図に来る春暁の明かりかな 松戸

入河 大

真上から覗けば鬩りチューリップ

口笛に遅れ老鶯応へける 松戸 野田成夫

くすぐりに眠りつづける仔猫かな

海越しの立山連峰春がすみ

夕空にますます白き花辛夷

ゆつたりと鳩ついばめる春日向

訪ね来しふるさとの路地春日影

髪を切る吾子の横顔初桜 市川 奥澤よし江

草餅の草の息吹をいただけり

泣き疲れ二人並んで春夕べ

土手畑道端屋根も花なづな 東京 安藤美酒々

ウオッカまで消毒液となる四月

煽られてふはりひらりと花楓

冴返る言問橋の戦禍の日

ウイルスにおののく春の行方かな

春の暮玻璃越しにみる星ひとつ

石楠花の大き蕾のまだ堅し

青空に香を放ちたる緋梅かな

駅前のヴィオロン弾きの大マスク

野田成夫

道草の囓みしすかんぼ日も遙か
花筏雀二羽乗る石神井川

春深し空つぼの街暮れなづむ 東京 桑原優美子

借春のサッカーボール蹴り上げる

赤鬼のやうな夏の日早く来よ

しつとりと丁字色なる土筆伸ぶ

木の芽晴津波の止めし掛時計

秋篠の木蓮匂ふ伎芸天

居間の灯の今宵明るき籬の宴

行く春や空白となる予定欄

こまやかに医師は語れり桜草

静まれる校庭かこむ朝桜

連翹の花の道行くランドセル

夕闇にほのかに白し雪柳

庭先の格子飾りに君子蘭

古民家の庭に一本遅桜

春の夜の輝き満つるスーパームーン

春の夜や音を絞りてクラシック

やうやつと今年茉莉花咲く気配
菜の花や土手いつばいを染めつくす

緋毛氈に並ぶ古色の籬道具 東京 中ノあさ子
白酒をふふみて聴けり籬囃

踏まれても尚咲かむとす鼓草

咲き満ちて桜千本川に沿ふ

芹の香に一家和める夕餉かな

母の忌を飾るが如く春の雪

杉菜土筆混じれる犬の鼻の先

式なくて放課後のまゝ卒業す

朝の芽の夕べに五指開く春もみぢ

旅立ちの尾翼に架かる春の虹

チューリップと願ひふくらむ定年日

春寒しパーガー買ふも距離あけて

春嵐花片舞ひ込む十三階

初蝶やコロナ騒ぎも知らぬ風

休校の続く少年啄木忌

花筏オールの波にかき消され

春の月高層ビル街息ひそめ

人通りなく何時の間か葉桜に

沈丁花の香りの手向け震災忌
春満月並んで見上ぐ猫二匹

馬場美智子

東 順子

平子 甲奈

福田ふみ子

藤田信子

中澤桃子
本多 葵

なみなみと陽の注がるるチューリップ

会釈してゆづり合ふ道うららけし 東京 松野寿美代

花吹雪前足立てし名馬像

雪形の白鳥現れて富士晚春

東北に生きぬく人や木の芽張る

店先を一閃奥へ初燕

岬の宮石段埋む古雛

鼻先に猫の寢息や目借時

腕白も泣き虫も居てチューリップ

亡き人に泣かれて覚めし春の夢

春山に炭焼く煙今何処

芽吹き待つ木立の中の小径かな

弥生満月緑道逍遙清氣満つ

清公池囲む若葉の薫りをり

あるなしの風に寄せらる花筏

桂離宮石垣に沿ひ露の莖

春天や上へ横へと雪の舞ふ 三 南場雅子

藪中を華やかにして斑の椿

家籠り桜吹雪は夢の中

奥多摩の森てふてふの白きとぶ 日野 渡辺八枝子

清明の谷戸を突つ切り風の息

昭和の日山の茶店のカレーパン

植込を鴉の歩む斑雪 横浜 阿部トキ

青空へ咲き広がりし梨の花

山笑ふ大樹の穴に観世音

黄水仙鬘をきりりと若女将

白えびの軍艦巻や春の宵

春光や釉薬瓦の能登の町

チューリップ影黒々と揺れるたり

木の芽風嘴音高き小啄木鳥かな

風光るベイブリッジに白き船

雨上り弥生満月皓々と

遠くより白蓮盛る妹の家

咲き出でし黄水仙食ぶ番鴨

駆け下る車椅子の子草若葉

土佐みづき水音高く跳ぬる鯉

チューリップ背をはみ出すランドセル

花きぶし袴の少女ほほゑめり

春疾風レインボーブリッジ吹き飛ばす

鴛鴦の花散る川に遊びけり

松本幸男

三村紀子

宮崎正義

宮脇秋峯

南場雅子

渡辺八枝子

阿部トキ

大駒泰子

岡元枝

加藤和子

後藤晴子

坂本具子

大辛夷切られ氏神風通る

横浜 鈴木律子

葱坊主一畝残し摘みとらる

桜散る小さな社ありし跡
橋渡りまた春泥の道つづく

川崎 横山ユキ子

畦を塗る鋤幾度も水につけ

街道の芭蕉の句碑や杉の花

ジツパーの咬み癖ダウンコート脱ぐ

富田 要

牧場の跡継ぎの絶え春の草

此の年の花見はたれと亡き妻と

出拂うて駐車場平ら花辛夷

鎌倉 佐藤千晴

花咲きて散りて九人人住まず

長野高朋

諸葛菜人無き町は良き昭和

名刹の静寂を破る落椿

山間の透けた空気に芹を摘む

園帽子ふはりと飛ばす花菜風

寒明けや昨日に変はる今朝の空

吹き寄せの色とりどりや春来る

大和 中谷由郁

陋屋の垣に一本寒椿

三木豊子

金次郎吹雪く桜に目もくれず

風一陣踊子草は踊らざる

蹲ひの水輪に揺るる雪柳

伊勢原 長嶋和子

利休忌や座像の軸と菜の花と

天守閣眼下に淡し朝桜

水盤の誕生仏や黒光り

豊 美佐子

還暦の看板娘 桜餅

はじめてのスマホ見せ合ふ新入生

せせらぎに陰落とし行く花筏

本島 廣

早春のダイヤモンド坑碧き水

去り難く岸辺に留まる花筏

遠櫻介護介護に過ぎし日々

川崎 青木明代

空に舞ふ仲間にさらば花筏

さりげなく花盗人の土手に消ゆ

風光る夢の高さへボール蹴り

山本カツ子

生徒の声空に弾けて花満開

堰落つる水のきらめき落の蓋

耕運機蛇行しながら耕せり

安田良子

父と子の笑顔の似たり半仙戯

切株に年輪見ゆる余寒かな

初孫や早早揚がる鯉幟

森野 秋山憲三

芋田楽配る習はし郷の宮
矢車のカラカラ回り日をはじき
春耕や鎌に楔の音高く甲府江口嘉郎
里山の小川のへりに座禅草
統合の小学校に桜咲く
春障子柱時計の正午打つ静岡高橋一夫
夕日浴び桜色なる春の富士
貝母咲く更地となりし納屋の跡
春や春籤の大吉持ち帰る
春祭紅付け直す巫女溜
朱印帳の墨の濃淡春深む
しとしとと絵馬を伝はる花の雨
道灌の庭にほつほつ苜蓿
囀りや風に明るき古戦場
桜餅買うて興津の浜風に
坐漁荘の開かずの窓へ春しぐれ
東風吹くやみくじを開く笑顔の子
手水鉢読めぬ一字へ花の雨
地下道へ春の嵐の吹き込めり
枝垂桜触れむと乳児背伸びかな

江口嘉郎

高橋一夫

大石弘子

杉山紀美子

田中秀幸

内藤允昭

藻屑蟹防波堤にて引き返す静岡本多ひとみ
啓蟄の畑や獣の跡乱る
捨て畑を紫にしてすみれ草
お茶の里初うぐひすに迎へられ
田支度の煙一筋柳の芽
三椶やぼんぼん時計正午打つ
春筍や髭題目の墓の前
春愁や卓にこぼるるパンの屑
新社員飛翔と太く絵馬に寄す
千本桜木場のなごりの舟着き場焼津小梁洋子
花えんどう蔓が虚空を探りをり
鶯の初音に父の忌を修す
流し雛石にぶつかり逆しまに川根本鈴木裕一
涅槃絵図川よりの風弱まりぬ
春炬燵千羽目途に鶴を折る
三椶の咲けば小さき手鞠かな津瀬野喜代子
菜の花やクレヨンの黄を塗りつぶし
畑の端五ツ六ツと葱坊主
黙もくと剪定の枝束ねをり金沢白村喜久代
尼さまと気さくな話春炬燵

望月 南

矢野喜久江

あたたかやほほ笑みゆかし円空佛

ものの芽や止まつたままの大水車 金沢 田上ナツ子

きりかぶに一枝立ち上げ紫木蓮

ほつほつと音符のごとく菖蒲の芽

もう雛飾りたるかと夢の母

野辺に生ふるあさしらげ色やはらかし

風過ぎし後も馬酔木の花の揺れ

春空へ越の白嶺の輝けり

乙女椿活けてテールブルなごみたる

なごり雪土堀の菰を取りはづす

大津波去りて九年や牡丹の芽

水草の淡き揺らめき春愁

海境に鎮魂祈る春の虹

統合の校舎に重機春の雲

うららかや茶店のスプーン九谷焼

次の間も匂ひふくらむ春障子

居酒屋の無造作に活け山桜

お彼岸や墓に雑草早ものび

春日和行き先きまらず歩く老い

梅咲きて言の葉かけて過ぐるかな

道場啓子

廣田宏美

松田好子

宮崎恵美

保田ひろ

谷内瑞江

眠られず起きて凍て星眺めたり

軽やかに小川の音や露の臺

朧夜や傍に寝息の犬のゐて 金沢 谷内瑞江

うららかや生家の梁の黒光り

故郷の山河見飽かぬ山桜

風に揺れ豌豆の花蔓延ばす 白山 朝倉みゆき

桑の芽の黄緑艶や冷ゆる朝

板戸開け顔突き出せば初桜

里山や蕨ほつほつ拳上ぐ

鶴尾正江

鳥雲に深山侘しや風の音

紙風船突けば懐かし置き葉

木々の芽のみな天を指す日能忌 敦賀 伊上はるゑ

草餅にふるさと思ふ遠き日々

静まれる花を見上げて崎の宮

蓬摘む手の香にぎりて家路かな

内池宏行

片栗の紫衣をまとひて楚々と咲く

上向きの心に添ひて揚雲雀

貝寄風やふるさとのよき便り待つ

大田ふじ枝

子規庵の籬の裾や草萌ゆる

ぬかづきて甘茶一杓たてまつる

生まれたる山羊の鼓動や風光る 敦賀川口和代

湖見ゆる激戦のあと蓬摘む

花三分舞楽華やぐ石舞台

茶摘み歌唄ふ嫗や奥信濃

蕨狩呼び合ふ声の加賀なまり

如月や茶室に映ゆる一文字

春耕や一畝づつに土息吹く

草の芽の可憐な姿踏まずおく

飛来する小鳥が揺らす庭木の芽

寺を継ぐ嬰兒のおくるみ風光る

摘み草をひと品添へて夕餉の膳

満開の城の桜に立ちつくす

三里に灸するゑて芭蕉の春行脚

梅東風に乗りて大宰府までゆかむ

さざ波の光あふるる五湖の春

色とりどり頬ずりしあふチューリップ 明石前島

借景の大和三山夕霞

高層の風に落花の舞ひ上る

強東風に逆らひかもめ水面蹴る 徳島林

自粛して暇もてあます花の昼 早苗

凧揚げて風の子となる兄いもと

弁当食ぶ石のベンチの暖き 徳島山本晴美

夫の忌に合はせて新たな春障子

空は晴れ憂きこと晴れて山笑ふ

青空へ辛夷の固き花開く 山本瑤子

囀や幼は絵本諳ずる

草抜けば蛙飛び出す昼下がり

春の空飛行船なら似合ひさう 石井木内マヤ

春田打つ農夫はラジオ腰に下げ

泥破り踏の生えぬし天神社 小松島

くろぐろと艶めく雨後の春田かな 岡田あゆみ

水門の波が逆巻く春疾風

初蝶来祖母の遺愛のお針箱

この路地のたんぽぽ茎の細かりし 福岡相本和子

紫もくれん雨のあがりて深き色

あけくれの九階の窓はなの雲

やはらかな膨らみ見する木の芽かな 石原好宏

うららかな日々の訪れ待ち焦れ

春告鳥我が家の庭でもケキヨと鳴く

春めく日鳥の声にも力あり 園田清子

バドミントンの羽根春風にさらはるる
九年目に授かりし吾子桜鯛

風もまた大地にめぐみ竹の秋福岡宮田千恵子

日の丸のはためく春の町役場

小流れの音さらさらと春の歌

合格の声に明るき春彼岸那珂川高山ひさ子

校則にクセ毛矯正葱坊主

小さき庭小さき原種のチューリップ

縞柄を草に紛れて蜥蜴出づ西海山下敦子

恋猫の崖切るやうに走り下り

桜鯛花弁のやうに鱗散り

小さき手に小さき一輪瑠璃はこべ那珂砂川道子

朝されば庭一面のえごの花

一番に日当たるところトマト植う

あちこちで雪解けの音響く沢札幌石田 睦

雉鳩の鳴き声近く山笑ふ

池の鴨ぞいつとしてるぞいつとみる 多田陽子

北国の彼岸参りや雪漕いで

根分けして牡丹百合の苗水遣りす 多田陽子

仏壇に草餅供ふ母の月忌

風が押す雲間に春の空蒼し札幌田邊政代
足軽く散歩の犬や木の芽時

残る鴨いくたびも啼きかはしつつ新潟高野松風

嘴に藁くづたるる春の鳥

SLへタンポポを振る園児かな宇都宮安久都 登

老桜の支柱みまもる寺男

薯植うる翁の脚の間隔で芳賀稲川清子

仔猫を抱けば親猫の怒り顔

白雲を浮かべて川面風光る真岡上野恭子

ペダル踏む少女の髪に風光る

路のたう揚げて娘を待つ宵の口鹿沼渡辺利子

春嵐墓前の供花も倒しけり

水害のありし堤の桜かな佐野荒川 進

山茶黄の花や園児の笑ひ声

遅き日のつもりて遠きふるさとや 磯貝綾子

春なれや唐沢山の薄がすみ

誕生日三毳全山芽吹きたり 木村君子

朝採りの豌豆を載せ蟹ピラフ

満開の桜の幹の黒々とさいたま須藤初枝

地に触れてなほ真白な雪柳

綿飴の如く甘美な春の雪 新座 多田英治

春の日を追うて静寂の平林寺

ペダル踏む草木薫風ほんのりと川 越 常見イツ子

水温む川洲の鷺のゆるやかさ

鷺や橋脚 深き谷田より 千葉 岡野恵美子

今朝の靴桜色にす花見晴

春の雪初恋のごと淡くあはく 松戸 菊岡緋路

秀吉の枝垂桜に包まれて

青き空仰ぐ庭には芽吹き沙羅 東京 石山風童

浮雲のあかねに染まる夕桜

街灯のちらつく影や浮かれ猫 齊藤孝夫

経木の香ばた餅の香や春の雨

犬ふぐり遠慮がちに庭の隅 鶴田智美

花の下幼児南無南無六地藏

風にのり道に散り敷く桜花 西村サカエ

足止めに静かに開く花の色 荒井 仁

花朧万物湿りやすきかな

春の河石投げて波かがやかす 府中 竹村晃子

初燕玄関先であいさつし 府中 竹村晃子

抹茶点て香を味はひぬ桜餅 国立 阿部幸子

寂寞や心做し白く見ゆる花

残る花夕日にさやぐ風の道 横浜 岡田幸吉

農夫老い荒れし梨畑花は咲き

弟を葬る 朝 春 驟 雨 奥野周光

休校に戸惑ふ生徒卒業期

広口の花瓶に供へ紅の萩 柴田雅春

掛軸の墨書のふとし秋海棠

犀川の桜浮かびて川あかり 金沢 北野陽子

夜桜の底まで見ゆる地獄堂

春雨の水輪にジャズのリズムかな 新出祐子

山裾のいつもの木立初音かな

春あけぼの遺影に笑みを返しけり 高木艶子

花冷や城の死角の風多門

蜥蜴出づ少年の眼の輝けり 小松島 田上幸子

給食の目刺食べたぞ一年生 長崎 下見直哉

赤富士や駅のホームの染まりたる

爆音のたちまち消ゆる梅雨の雲

万象作品の佳句

飛 高 隆 夫

托鉢の錫杖の音 花菜道 草間三香子

一面の菜の花畑の中をつらぬく一筋の道。その道をお経を唱え、錫杖を鳴らしながら歩む数人の黒衣の僧侶の列。のどかな田園風景と宗教的雰囲気為何の違和感もなく溶け合っている。澄んだ空気に錫杖の音もよく響く。作者は東京の人。

がちな歩む身の丈に合ふ暮しかな 謝 花 寛 営

がうなは寄居虫(やどかり)の古名である。エビ目の甲殻類で巻貝の空殻に入り、成長して大きくなると貝殻を取り替える。まさに身の丈に合う暮しの実行者である。作者はそんな寄居虫が貝殻を背負って歩む姿を見て、自分の暮しのありようを、ふと顧みる思いになったのか。作者は那覇の人。

堰三段帯解かれたる春の川 古谷悠紀子

帯という例えから思い浮かぶのはあまり川幅のない川であるが、流れを調節する堰が三段構えなのは流量が豊かなのか。その堰を流れ下る川の様子が、解かれた帯がさらさらと流れ落ちるようだ、というのである。帯が流れるという比喻は古

風のようなであるが、それが反って新鮮である。作者は松田の人。

囀や信号を待つ 盲導犬 小坂橋泰山

交差点で赤信号が青に変わるのをひっそりと待っている盲導犬。美しい小鳥の囀りが降り注いでいるが、盲導犬はただ静かに信号が変わるのを待っている。賑やかさと静けさ、つまりは動と静との対照による句。作者は横浜の人。

何もかも覆ひて咲ける桜かな 砂 地 宏 子

いわゆる「花の雲」を上から見下ろすとこのような状態になるであろうが、この句はそのようなことが言いたいのではない。桜が咲くとはこのようなことだ、と言っているのである。実景ではなく実感の表現。作者は武蔵野の人。

名を呼べばにやあと返事の臘月 久保田富士子

「名を呼べばにやあと返事の」と来て、ああ、猫の話だなと思っていると、「臘月」とすつと逸らす、この逸らし方が見事である。空気もうるんでいるような臘月の夜に、まことに似合う一句である。作者は茅ヶ崎の人。

国語より英語大事や四月馬鹿 大林 彬 彦

英語は小学生から必修に。国語は実用性を重んじて、高校の国語教科書から文学作品は姿を消すのではないかと、危ぶまれている。もう「言霊の幸ふ国」の面影はない。作者はそ

のような状況は四月馬鹿の話であって欲しいと願っているのである。作者は調布の人。

選者より

架橋工事じつと見守る葱坊主 平岡 功
橋をかける工事が進められていて、その近くの畑の隅に数列、葱坊主が列をなしている、という情景である。葱坊主は種を取るために残された葱が咲かせた花であるが、坊主頭に似ているのでこの呼び名がある。たとえ花であるにしても、「坊主」であるからには見ることもぐらいはするであろう、というのでこの句になった。作者は徳島の人。

花の昼和菓子職人手を休め 入山 繁幸
多分、一区切りついたのであろう。和菓子造りの作業に集中していた職人が、ふと手を休めて、放心したように表に目をやっている、というのである。「花の昼」という季語が和菓子の美しさに調和している。作者は大阪の人。

雛飾るかくし様なき手の齢 内田 節子
雛を飾る手を休めて、その手にじつと見入っている姿が浮かぶ。手の齢というものは、作者のいう通り、偽ることのできないものだというのが、年を重ねても齢を取らない雛の姿が、作者に自らの年齢を顧みさせることになったのか。さて、作者は自らの手の齢に何を思ったか。含みの多い句である。作者は船橋の人。

○「名草の芽」を季語として使った句が数句見受けられました。「名草」とは「名のある草」という意味で、角川の俳句大歳時記には「朝顔、桔梗、芍薬、牡丹、薔薇、紫陽花、アヤマなど名のある草の芽」を一括して「名草の芽」というと説明してあります。ほかに「名のある草」はいろいろとあります。ですから、「名草の芽」と句の中でいわれても、それが何の芽なのか、具体的なイメージが湧かないのです。ということは、「名草の芽」は季語として普通に使う言葉ではない、ということですので。歳時記では、朝顔の芽、桔梗の芽、芍薬の芽など一つ、一つ、項目を立てると整理がつかなくなるので、「名草の芽」という項目を立てて整理しているのです。使うには特別な注意が必要です。

○次に「漢」という字について。普通「男」となるところに「漢」の字をあてる句もしばしばみかけます。「漢」という字には、たしかに「男」という意味があります。しかし、その場合には使い方に限定があつて、形容語とともに使われるのが普通であると、昔、漢文の先生に教わりました。好漢、正義漢、悪漢、痴漢、などなのです。また、「漢」に大男の意味はない。「男女」という熟語があり、立派な男子を意味する「士」にも「士女」という言い方がありますが「漢女」という熟語はないということも、「男」と「漢」との違いを示しているということですので。

同人会便り

東京支部の五年間

吉中愛子

「風」の時代から、東京での支部を立ち上げる事は難しいと言われてきた。「万象」になって会員数も減り、高齢化に伴い、全国大会も東京近辺で行うことを余儀なくされてきた。組織化が必要とされ、「東京にも支部を」という意見がまとまり、早速、支部長を山田春生先生に、副支部長を江見悦子さんにお願ひして、平成二十七年五月二十九日、俳句文学館地下ホールにて発足句会を行った。次いで同年九月八日には「東京俳句スクール」を、杉並区高井戸地域区民センターにてスタートさせた。初回到三十名ほどの参加があり、これならやっつけていけると実感した。以後、毎月第二火曜日を定例句会として現在に至っている。

「全員参加型の句会を」を合言葉に、輪番制による一人一人自由なスピーチ、句会後の活発な質疑応答、兼題、席題等、色々な試みを受け、鍛錬吟行句会等を実行してきた。多くの方からの応援のお蔭で、数名の入会者もあり、「万象」の仲間として活躍している。

この「東京俳句スクール」を、東京支部の組織の核として今後とも発展させていきたい。

今年十一月二十九日(日)には、文京区本郷で、東京支部五周年記念の句会を開催予定だがコロナウィルスの影響もあり気を揉んでいるところである。

珈琲ぶれいく

②



【問】今回も引きつづき「下二段活用」についての勉強です。正しい方を選びましょう。

1. 堪(え・へ)がたし稲穂しづまるゆふぐれは 山口誓子
正解は「へ」。「我慢する」の意味の「堪える」の文語動詞終止形は「堪ふ」。ハ行下二段活用で「堪へず、堪へたり、堪ふ、堪ふるとき、堪ふれば、堪へよ」となります。ここでは下にある「がたし」という、形容詞型活用の接尾語に繋がるので、連用形の「堪へ」が使われることとなります。同じ意味で「耐」という漢字を使うこともあります。口語の音が同じ「絶える」は、文語では「絶ゆ」。ヤ行の下二段活用なので間違えないようにしましょう。

2. 春駒や己が宿より舞うて出(ず・づ) 松瀬青々

正解は「づ」。句意は「正月の門付芸能の春駒を演じる男が、自分の家から舞いながら出て来るよ」というもの。ダ行下二段活用「出づ(いづ)」は「出でず、出でたり、出づ、出づるとき、出づれば、出でよ」と活用します。その終止形ですから、「出づ」でなければいけません。「出ず(でず)」は「出る」という口語の動詞に文語の否定助動詞「ず」が付くという不自然な形になっています。否定ならば未然形の「出でず」とするところですが、音数を合わせるために間違えて「出ず」としている例を見かけることがあります。

「万象」中央句会報（四月例会に替えて通信句会）

投句40名

内海良太主宰選

玉垣を蝶の翳過ぐ光悦忌 山本右近
 菜の花の土手ゆるやかに川曲がる 山本とく江
 一掘りで蛙起こしてしまひけり 上岡佳子
 徒長枝の丈を余さず花あんず 中村千久
 伐採の決まりし櫛の芽吹きをり 中村千久
 黒潮の紺たたみ来る春の浜 下嶽孝一
 又一軒空き家がふえて露の臺 内田郁代
 蛸蛸出づ細き尾ついとまるめては 増田幸子
 エレベーターに卒塔婆持つ人彼岸かな 加賀葉子
 雑壇の前這ひ回り誕姫 谷田部 栄
 コロナ禍や彼岸会の堂開け放ち 赤堀洋子
 桜かくし筆筒にさす体温計 増田幸子
 桜かくし筆筒にさす体温計 増田幸子
 ④乱世や夜を吹きつのる花の風 江見悦子
 日本国内でも世界を見回しても、政治・経済の状況を見ると確かに乱世にちがいない。そのうえ新型コロナウイルスの感染が追い打ちをかけている。花の夜の風が象徴的。

⑤摘んで来て土筆四本持て余す 内田郁代

野遊びで土筆を食べるといふ人が摘んでいるのを見て、自分もつられて摘んでみた。帰宅して萎れきった土筆を見

てどうしたものかと持て余している。誰もが心当たりのある句は共感を呼ぶ。四本というのが具体的に面白い。

飛高隆夫選

まんさくの花空谷を明るうす 佐藤嘉洋
 墨堤に炊出しの列涅槃西風 小池宗彦
 花菜挿すコップの水の減る速さ 上岡佳子
 伐採の決まりし櫛の芽吹きをり 中村千久
 花の雲小江戸に響く時の鐘 山本とく江
 桜の色濃くなりにつけり雪の中 田中道江
 巣づくりのこげらの零す木屑かな 奥 太雅
 子等寄りてその名を囁す初音かな 中村千久
 鶯の声ふりしぼる花の奥 江見悦子
 ⑥何もかも覆ひて咲ける桜かな 砂地宏子
 いわゆる「花の雲」の印象を表現したものであるが、一氣にいい下した表現から、この世の全てが桜の花に覆われてしまったという、豪華な美しさが眼前に迫る。

江見悦子選

まんさくの花空谷を明るうす 佐藤嘉洋
 芹摘の声の拡がる荒鋤田 内田郁代
 九十の恋はまことか四月馬鹿 小池宗彦
 学校の閉鎖花壇のスイートピー 山本右近
 流水の岸をはなるとき唸る 小池宗彦
 コロナ禍や彼岸会の堂開け放ち 赤堀洋子

佐保姫の沼辺の芦にひそむらし 原田しずえ
 ウイルスに閉ざす校庭花満てり 草間三香子
 桜かくし筆筒にさす体温計 増田幸子
 ⑤梢より揺るる辛夷や山動く 岡村純子
 山中に純白を散らす辛夷の太木が、梢から大きく揺れ始
 めた。その揺れが一山の律動となつて、山は新しい命によ
 みかえる。「山動く」と、おおらかに大胆に言い切つた、明
 るく生命感あふれる句。芽吹の淡い緑と辛夷の白の対比も
 美しい。

原田しずえ選

あつと口開けし目刺や朝の膳 下嶽孝一
 石運ぶ列車は通過花の駅 内海良太
 花菜挿すコップの水の減る速さ 上岡佳子
 葱畑を走り出でたる雉子かな 内田郁代
 葛飾や朝日に弾む揚雲雀 名和政代
 手帳みな十七文字や囀れり 谷田部 栄
 竹林を音なく抜ける桜まじ 杉浦 一子
 初燕蔵町の路地曲るとき 山本とく江
 青空へ溶け入る桜散る桜 須賀允子
 ⑥鴨の声ふりしぼる花の奥 江見悦子
 春の明るい情景。鴨を具体的に捉え、さらに花の奥の存
 在感がいきいきとしている。視覚と聴覚のかね合いが見事
 に成功している句。

山本とく江選

初つばめ犬吠埼を丸くとぶ 内海良太
 うららかや雲から雲へ飛行船 砂地宏子
 金髪を吹かせて行くや花遍路 中村千久
 一掘りで蛙起こしてしまひけり 上岡佳子
 九十の恋はまことか四月馬鹿 小池宗彦
 木造の駅舎に匂ふ朝桜 内海良太
 もろもろの草の目覚めや鳥雲に 原田しずえ
 梢より揺るる辛夷や山動く 岡村純子
 先がけて咲く辛夷の存在感、「山動く」の着想が見事。
 ウイルスに閉ざす校庭花満てり 草間三香子
 正にコロナ蔓延の情景で「花満てり」が寂しく悲しい。

⑦春耕や畝に沼風鋤き込める 原田しずえ
 耕運機の景であろうが「沼風鋤き込める」の繊細な感覚、
 活写に感動した。

吉中愛子選

初つばめ犬吠埼を丸くとぶ 内海良太
 切株の甘き香りや春の宵 草間三香子
 春草を雀つつつと走りける 茂木弘子
 木造の駅舎に匂ふ朝桜 内海良太
 桜の色濃くなりにつけり雪の中 田中道江
 もろもろの草の目覚めや鳥雲に 原田しずえ
 流水の岸をはなるとき唸る 小池宗彦

今懸けし巢箱の見ゆる書斎かな 奥 太雅
利休梅白咲き満ちてこぼれざる 須賀允子

④摘んで来て土筆四本持て余す 内田郁代
「摘みて来し」ではなく「摘んで来て」と口語体で詠んでいるところに「土筆」という季語に対しての童心を感じる。掌の土筆を見て、さてどうしようとするのは、四本だからだ。

▽中央句会7月例会（通信句会）7月6日投句締切。

「万象」同人句会報（四月例会に替えて通信句会）

投句46名

内海良太主宰選

清明や音の重たき水車小屋 島野ひさ
さざ波はゆりかご志摩の桜貝 下嶽孝一
ふんはりと大地浮かべて石鯨玉 三屋英俊
囀りに窓開け在宅勤務かな 古川京子
無乗客列車は往くよ花吹雪 竹澤竹里
ビル光り柳青める日比谷濠 下嶽孝一
百歳に近づく日々や春満月 三澤治子
ゆるやかな運河の蛇行燕来る 山本とく江
山藤の樹々からまる高さかな 須賀允子
手探りで列を真つすぐ蓮根植う 沢辺たけし
朝刊の思はぬ軽さ啄木忌 江見悦子
余つ程のことがなければ飛ばぬ雉 奥 太雅

はこべらや這ひ這ひの子の足裏美し 喜多尾明子
④地下足袋の小鉤に残る春の土 小林珠江

土の凍てが解け、草が萌え出るところの「春の土」からは「春泥」とは違う命の躍動が感じられる。農作業が本格化する頃、庭先に脱がれている地下足袋の小鉤の土が即物的でいい。

④まつすぐな青麦活けて明日は明日 小林愛子

青麦の真つすぐな立ち姿は、きりりと引きしまった凛とした感じがする。このご時世最善を尽くして明日を待とうという気持は誰にもあり共感する。青麦に自分の想いを託した句。

小林愛子副主宰選

花守の忘れし帚花は葉に 山本右近
囀りに窓開け在宅勤務かな 古川京子
茉莉花の花咲く森のレストラン 山本絢子
子が生まれ村入口に鯉のぼり 内海保子
わが庭をひとまはりして春惜しむ 山田春生
折紙の恐竜の立つ春休み 加賀葉子
④手を洗ひ又手を洗ふ春愁 新妻奎子
新型コロナウイルスの感染拡大は世界各国に分断が広がる中で起きている。得体の知れないウイルスから身を守る手立ての一つとして手洗いを奨励された。春だから感ずるそこはかとなない愁いに現実的な愁いが重なり、それを振り払うかのようにひたすら手を洗う。

江見悦子選

カーテンを開くあかるさ君子蘭 田中道江
 春愁や二合の米の水加減 広瀬俊雄
 咲き満ちて桜かくしに枝垂れたる 中村千久
 山藤の樹々にからまる高さかな 須賀允子
 折紙の恐竜の立つ春休み 加賀葉子
 郁子の花咲くよりも散る夜も散る 小林愛子
 ⑤万年の地層抱ふる春の谷 佐藤嘉洋
 ようやく春の息吹を感じさせる谷に、地層が露わだ。幾
 万年もの地球の歴史が積もり重なった地層を、「春の谷」が
 「抱」えている、と捉えた。無機的な地層と、命溢れる春
 の溪谷。これも自然の豊かな在り様である。今年一月、G
 SSPに認定された、市原市養老溪谷の「チバニアン」を
 想像した

吉中愛子選

葉桜や自在に描く空の色 横川良子
 先ほども今も目の前昼の蝶 中嶋久登
 筑波嶺の昏れぎは野火の二つ三つ 内海良太
 百歳に近づく日々や春満月 三澤治子
 朝刊の思はぬ軽さ啄木忌 江見悦子
 池簀に鯉投げて桜の吉野山 久保村淑子
 ⑥春愁や二合の米の水加減 広瀬俊雄
 何てことの無い日常の句。この句から想像すると、作者は

テレワークで落ち着かない日々を送られているのではない
 のか。二十四時間家で過ごすとなると何かせずには居られ
 ない。思いついたのが米磨ぎ。単純に見えて気を遣う。品
 種によつては水加減も違う。妻を頼りの自分を愁い今の世
 を憂う。季語により様々な事を思う。

内田郁代選

菜の花へ盲導犬と白き杖 山崎郁子
 筍の土の匂ひを確かむる 久留島規子
 補助輪を外す勇氣や桜の実 横川良子
 わが庭をひとまはりして春惜しむ 山田春生
 鶯や身を耳にして次を待ち 加賀葉子
 郁子の花咲くよりも散る夜も散る 小林愛子
 ⑦春の雷将門ここに旗揚げす 内海保子
 下総には広範囲に亘って「将門伝説」が多く残っている。
 掲句は少し古さも感じるが、春の雷を、とつさに将門の旗
 揚げと捉えたところに発想の豊かさを感じる。思いがけな
 い取り合せだ。「春の雷」が動かない。

広瀬俊雄選

花びらの渦巻く道に人気なし 桔梗 純
 蔵街の波打つ瓦春の雪 名和政代
 筍の土の匂ひを確かむる 久留島規子
 補助輪を外す勇氣や桜の実 横川良子
 入学児力一杯名を名のり 恒川清爾

焼きあがるパンのかをりや春の雪 新妻奎子
 ④夜神楽の女を舞ひし喉仏 三澤治子
 子供の頃の、お祭りの楽しみは、いろいろな屋台を回つての買い食いや、お神楽を見る事であつた。特に素戔鳴尊の八岐大蛇との立ち回りに興奮した。掲句は、お神楽を舞うお多福女(多分)が実は男であることを、舞手の喉仏から見破つたという観察が鋭くて、面白いと思つた。

沢辺たけし選

囀りに窓開け在宅勤務かな 古川京子
 磴百段登り切つたる初音かな 須賀允子
 地下足袋の小鉤に残る春の土 小林珠江
 補助輪を外す勇氣や桜の実 横川良子
 水口の音も豊かに田水張る 内田郁代
 手を洗ひ又手を洗ふ春愁 新妻奎子
 ④子が生まれ村入口に鯉のぼり 内海保子
 「村入口」は道切の風習が残っている地方なのかもしれない。過疎化が問題になって久しいが、そんな村にも赤ちゃんが生まれた。実に目出度い。「鯉のぼり」だから生まれた子は男の子と考えてもいいが、男の子でも女の子でもよい。新しい生命の誕生を村全体で祝っている。そんな思いが伝わってくる。

奥 太雅選

花守の忘れし帚花は葉に 山本右近

笱の土の匂ひを確かむる 久留島規子
 子が生まれ村入口に鯉のぼり 内海保子
 水口の音も豊かに田水張る 内田郁代
 はこべらや這ひ這ひの子の足裏美し 喜多尾明子
 手を洗ひ又手を洗ふ春愁 新妻奎子
 ④コロナ禍や庭に二本の茄子植うる 広瀬俊雄
 コロナウイルスの蔓延に、世界中の人々は、今底知れない不安と恐怖の日々を送っているが、その中で心の安寧を得られる園芸が注目されている。作者もきつとその一人に違いない。手始めに植えた僅か二本の茄子ではあるが、茄子の成長を見守る事で、穏やかな日常を得られている事と思う。かく言う私もその一人である。

▽同人句会7月例会(通信句会)7月25日投句締切

お詫びと訂正

六月号 73頁上段二ヶ所に「杉田品絵」とありますが「桜田品絵」さんの誤りでした。大変失礼いたしました。



俳句

7月号 予告

6月25日発売
予価(本体945円+税)

特別作品「長谷川權・大石悦子・寺井谷子

大特集

7テーマで実践! 身近な素材の見つけ方

▼総論 限られた素材で詠む効果……西山 睦
家族・動物……高田正子／窓からの景色……拔井諒一／
衣服……佐藤博美／食……山田閔子／家具……相子智恵／
本・新聞・映画など……堀切克洋／夢・幻想……福田若之

人物特集

廣瀬直人『廣瀬直人全句集』刊行記念

▼人と作品……宇多喜代子 ▼師系ということ……井上康明
▼私の選んだ5句 池田澄子・佐藤文字・若井新一
伊藤伊那男・藤田直子・小澤 賢

新連載

巻頭俳画 田島ハル

連載 名句水先案内……小川軽舟／最愛俳人館……恩田侑布子
現代俳句時評……白濱一羊

シリーズ「コロナの時代の俳人たち」堀本裕樹・青木亮人

電子版同時発売! 電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>)など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA 0570-002-301(ナビダイヤル) <https://www.kadokawa.co.jp/>

月刊 俳句界 2020年7月号

毎月25日発売
定価1000円(税込)

特集 波多野爽波

◎波多野爽波百句 抄出岸本尚毅
◎爽波との思い出

◎論考 原田暹 小川春休
◎一句鑑賞 中岡毅雄 青木亮人

◎特別作品30句 小檜山繁子

◎一句鑑賞 草深昌子 山口昭男 森賀まり
岩田由美 阪西敦子 拔井諒一

◎「自選」とは何か 対馬康子
今瀬剛一 高橋将夫 鈴木しげを
和田華凜 渡辺誠一郎 高田正子
山崎十生 奥名春江 秋尾敏 ほか

◎「私の一冊」 介弘紀子「さわらび」
本セクション結社「湾」和田洋文

◎特集「甘口」対談を振り返る
佐高信(評論家)

◎別冊 投稿俳句界 一流選者15名!
日本一充実の投句欄

※一部変更の可能性あります。



株式会社 文學の森

お求めは……●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com>

新刊図書のご案内

三澤治子第一句集

花梯 梧

四六判、箱入り
上製本、二二六頁
二千七百円

三年日記百歳越えし母へ買ふ
ヒマラヤの風に干さるる麦の束
夏越の雨伊代次の句碑へ音もなく
付いて来し月へ振り向き手を合はす
湘南の空に色増す花梯 梧

三澤治子さんの作品は身边や大自然からの題材をねんごろに掬い上げる。

外向的な資質と鋭い直感力で、大らかで直截的に詠いあげるのが特徴である。

「万象」主宰 内海 良 太

角川書店

※ご希望の方は「万象」発行所まで

新刊図書のご案内

三澤いつ子遺句集

紙 雛

四六判、箱入り
上製本、一七八頁
二千七百円

女正月届く手製の葩餅
母の名を記して海へ紙雛
羅の軽き衣ずれ茶懐石
夏足袋に鼻緒のあとや母は亡き
髪切つて真珠を耳に秋初め

いつ子さんの俳句は湘南の風土に根ざし、純真で奥ゆかしく優しい句風を示している。

心こまかく言葉に拘り、即物具象による写生の作品を成している。

「万象」主宰 内海 良 太

角川書店

※ご希望の方は「万象」発行所まで

東 西 南 北

消息等

内海良太主宰の「野火」8句、「角川」5月号に掲載

灯台の灯の回り来る椿垣
春雷にしては大きく響きたる
鮫鯉の混沌としてこの重さ
捨て船の竜骨あらは揚雲雀
鹿島灘春満月が珠となる
差潮の盛り上がりたる白子干
枯葦をばりばり踏んで残る鴨
筑波嶺の暮れぎは野火の二三つ

小林愛子副主宰の句（「万象」4月号）、
「春耕」5月号に鑑賞「現代の俳句」
で藤目良雨氏が次のように鑑賞

蝮酒澄み渡れるも寒の内
蝮酒の瓶の中はいつも何やら濁って見える。それが寒中には澄み渡って見えるというのだ。全てのを瓶の底に沈める力が寒中にあることを作者は発見して一句が成った。

俳人協会千葉支部俳句大会事前投句
4月29日開催予定だったが、新型コロナウイルス感染症予防の為中止となった。

事前投句入選作品集によると、応募は九百二十二句。「万象」入選作品は次の通り。

大会佳作

白鳥を見に行き鴨を見て帰る 内海良太

蓮井宗男 特選

女正月声はり上げて早春賦 内海保子

三枝青雲特選

叱れども聞かず寒鴨 入河太

入選句

沼よぎる鶯が光りを曳いて春 内海良太

冬の百合祈る言葉につつまる 沢辺たけし

傷癒えし鶯に水の匂ひかな 沢辺たけし

柳の芽河童の沼を明るうす 内田郁代

原発の排水は海へてふ寒さ 内田郁代

金沢尾山神社の綾子句碑、移転完了

あかね句会からお知らせのあった（4月号37頁）細見綾子先生の句碑（鶏頭を

三尺離れもの思ふ）の場所移転が完了し、

尾山神社東唐門から入った通路左側に、

他の石碑と並んで設置されました。

句集紹介

茅ヶ崎の三澤治子さんが、第一句集『花梯梧』を上梓し、併せて一昨年三月

に逝去された、妹の三澤いつ子さんの遺句集『紙雛』を刊行した。刊行月日の5月21日は治子さんの誕生日、目出度く97歳を迎えられた。同人の最高齢である。『花梯梧』の表紙は真紅、『紙雛』は濃い桜色の表紙と華やかで美しい。姉妹での句集出版を心より喜びたい。おめでとーございませう。

編集・校正の現場から

江戸川区平井の事務所、4月号の初校を行った2月28日以降、事務所を使えないまま、様々に工夫しながら、「万象」誌の編集・校正を続けています。

現在のところ、編集会議だけは、発行所のマンションラウンジで2名で行っていますが、校正作業は、分担して完全に在宅勤務（う）です。

メール、郵便、FAX、電話等を最大限に活用して実施している今の形は、顔を合わせて意見交換できる従来の環境とは異なるものの、やり始めてみれば何とかやっていけるものだ、感じています。これからも焦らず着々と進めていきたいと思います。（報・江見悦子）

新規会員を紹介します

姓 号

郵便番号 〒

住 所

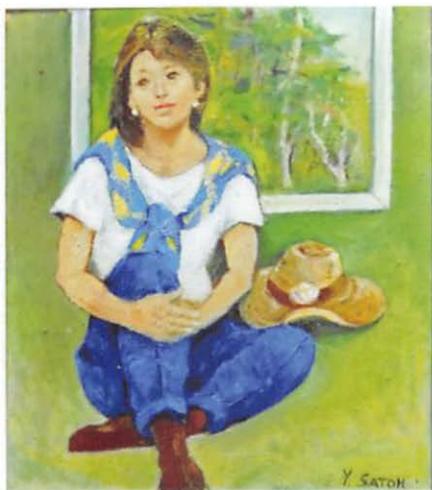
投句者住所 〒

投句者姓号

電話

万象
第十九卷 第四号 (通卷三二〇号)

平成十四年十一月十三日
令和二年七月一日発行
第三種郵便物認可
(毎月一回一日発行)



總 7